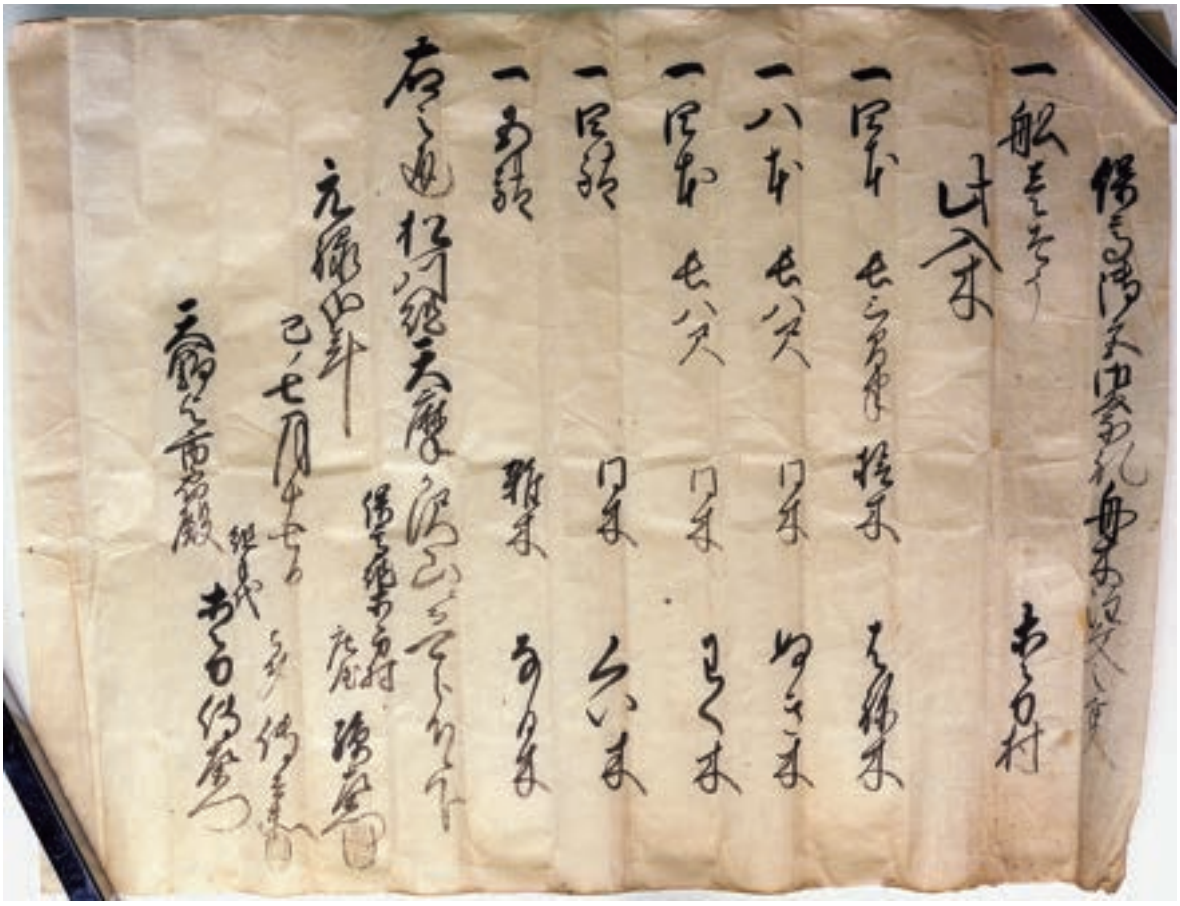
安曇野市豊科郷土博物館

紀要　第１号

平成26年３月

安曇野市豊科郷土博物館

新しく発見された穂高神社御船祭りの古文書



【等々力家文書Id62】

保高御宮御祭礼舟木注文之事

一、船壱そう　　等々力村

此入木

一、四本　長三間半　　桧木　はね木

一、八本　長八尺　　同木　ぬき木

一、四本　長八尺　　同木　わく木

一、四駄　　同木　くい木

一、五駄　　雑木　なる木

右之通、松川組天魔か沢山ニ而可被下候。以上。

保高組等々力村

元禄弐年　　庄屋　孫左衛門㊞

巳ノ七月十七日　　与頭　伝兵衛　㊞

組手代　等々力伝左衛門

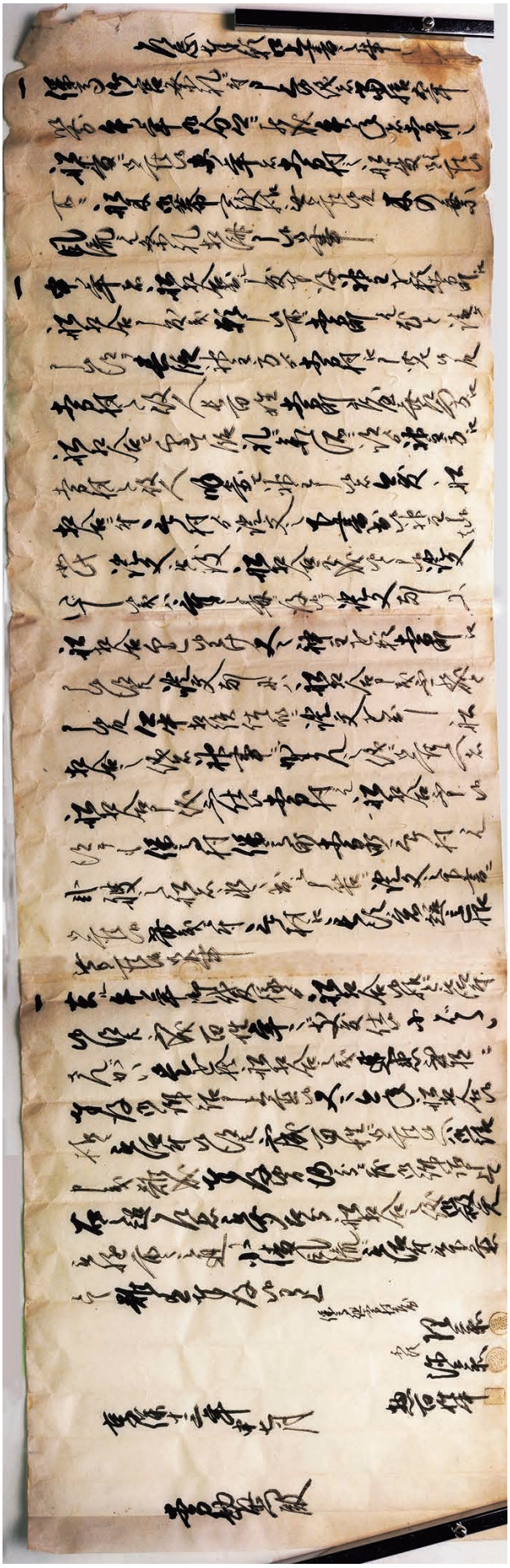
天野与市郎殿

（この古文書の読み方については、本文7頁の【史料3】をご覧ください。）

〈古文書の判読について〉

旧字や異体字は、常用漢字に直してあります。

変体仮名は、ひらがなまたはカタカナに直してあります。



【等々力家文書 Inb‘238】

乍恐奉願口上書之事

一、保高御宮祭礼ニ付、申上候儀は、当拾五年以前、午ノ年御分郷ニ罷成、午ノ年は等々力町之船番ニ御座候。未ノ年は等々力村之船番ニて御座候所ニ、船木・御幕可致様無御座候故、木の葉風流ニて祭礼相済申候御事。

一、申ノ年は船相合出シ申度奉存、神主を頼、等々力町江船相合申度義願申候所ニ、等々力町ニて丸と請ケ申候得テ、其段神主方より等々力村江申聞セ候故、等々力村之役人・長百姓、等々力町庄屋喜左衛門方江船相合セくれ候段、礼ニ参候所ニ、跡より神主方江等々力村之役人呼寄セ、神主申候は、今度船相合ニ付、三ヶ村より証文之下書出候。神主申し候は、如此証文被致、船相合可被成候と申候。証文いだし候義ハ気之毒ニ存候テ、証文なしに船相合くれ候わけ、又々神主を頼等々力町江申候得共、証文なしにハ船相合申義、不罷成と申候故、郷中相談仕候処ニ、証文を出し船相合之儀は神事ニがまん之儀ニ御座候へば、船相合申儀、不仕候。等々力村ニて船相合不申候得テも、保高村・保高町・等々力町三ヶ村ニて弐艘之船は永々出シ申筈ニ証文之下書ニ御座候。此義ニ付、三ヶ村江毛頭意趣(意)恨無御座候御事。

一、去ル午ノ年、御代官様より船相合候様ニと被仰付候得共、不成百姓年々ニ支度仕候小ばた・さんがい、是を捨、船相合之義、迷惑至極ニ奉存、御訴訟申上置候。又々今年船相合候様ニ被仰付候得共、不成百姓ニ御座候へハ、御請申義難成奉存候間、何分ニ茂御訴訟申上候。右之趣、乍恐被聞召分、船相合之儀、御赦免被遊、前々之通り小幡風流ニ被仰付被下置候ハヽ、難有奉存候。已上。

保高組等々力村庄屋　理兵衛㊞
与頭　弥兵衛㊞
享保十三年申七月　惣百姓中㊞
等々力勘左衛門殿

（この古文書の読み方については、本文11頁の【史料4】をご覧ください。）

安曇野のオフネそろいぶみ

平成 24 年現在、市内では 31 の神社の祭礼で 43 艘のオフネが曳かれ、担がれています。オフネの違いはもちろんとして、穂高神社御船祭りで繰り広げられるオフネ同士の激しいぶつかり合いをはじめ、祭りそのものの多様性も安曇野のオフネ祭りならではと言えます。

記載例
① 祭礼の行われる神社
② 地区（地域）
③ オフネの呼び名
④ 本祭りの催行日（宵祭りはその前日）
※祭り催行日は平成 24 年度現在のため、変更になることもあります。

①穂高神社②両町（穂高町・等々力町）（穂高）③大人船④９月 27 日

①穂高神社②等々力町（穂高）③子供船④９月 27 日

①穂高神社②穂高町（穂高）③子供船④９月 27 日

①穂高神社②穂高区（穂高）③大人船 ④９月27日

①穂高神社②穂高区（穂高）③子供船④９月27日

①矢原神明宮②矢原（穂高）③山車④秋分の日

①矢原神明宮②矢原（穂高）③こども船④秋分の日

①伊夜比古神社②富田（穂高有明）③舟④９月最終日曜

①豊里穂高神社②豊里（穂高有明）③御船
④９月第３月曜

①舘宮神社②嵩下（穂高有明）③山車④９月第３月曜

①新屋諏訪神社②新屋（穂高有明）③山車④体育の日

①古厩大宮神社②古厩（穂高有明）③船④９月第２日曜

①立足諏訪神社②立足（穂高有明）③舟④９月第２日曜

①牧諏訪社②牧（穂高有明）③舟④体育の日

①日吉神社②柏原 (穂高柏原) ③屋台（山車）
④９月第２日曜

①本村神社②本村（豊科）③山車④４月第２日曜

①新田神社②新田（豊科）③山車④４月第２日曜

①踏入八幡宮②踏入（豊科南穂高）③舞台
④４月最終日曜

①洲波神社②細萱（豊科南穂高）③舞台④９月最終日曜

①八幡宮②重柳（豊科南穂高）③お舟④秋分の日

①八幡宮②重柳（豊科南穂高）③屋台・舞台
④秋分の日

①真々部諏訪神社②真々部（豊科高家）③お船
④９月第２日曜

①春日社②熊倉（豊科高家）③舞台・お舟④４月 30 日

①田澤神明宮②田沢宮本（豊科田沢）③舞台・舟
④４月第２日曜

①田澤神明宮②田沢野田（豊科田沢）③舞台・舟
④４月第２日曜

①田澤神明宮②田沢南原（豊科田沢）③舞台・舟・かぐら
④４月第２週土曜・日曜

①住吉神社②楡（三郷温）③お船・舞台④４月最終日曜

①住吉神社②楡（三郷温）③お船・舞台④４月最終日曜

①熊野神社②中萱（三郷明盛）③お船④８月最終日曜

①熊野神社②中萱（三郷明盛）③屋台④８月最終日曜

①山神社②岩原（堀金烏川）③大人舟・担ぎ舟
④４月第４日曜

①山神社②岩原（堀金烏川）③子供舟④４月第４日曜

①中掘神明社②中堀（堀金烏川）③舞台④４月第２日曜

①下堀扇町諏訪神社②下堀（堀金烏川）③山車
④４月第３日曜

①大足諏訪社②大足平（明科中川手）③柴舟・ローソク
柴舟④体育の日の前日

①光五社②光（明科光）③オフネ・ブタイ④敬老の日

①犀宮社（犀の宮神社ともいう）②塔ノ原（明科中川手）
③柴舟・舟・舞台④体育の日

①潮神明宮②潮（明科東川手）③柴舟④５月５日

①潮神明宮②潮（明科東川手）③柴舟④５月５日

①上生野正八幡宮②上生野（明科東川手）③柴舟
④体育の日

①荻原神社②荻原（明科七貴）③柴舟④体育の日

①和泉神社②小泉（明科南陸郷）③柴舟
④10月第２日曜

①伊勢宮②田沢徳治郎（豊科田沢）③山車
④10月第２日曜

安曇野市豊科郷土博物館

紀要　第１号

目　次

新発見！　オフネ祭り最古の古文書
逸見大悟 …… 2

安曇野市のオフネ祭りの現状と特別展
「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」の活動報告
宮本尚子 …… 14

明科廃寺研究の今日的意義と今後の課題
～博物館講座「安曇野歴史散歩」の実践を通して～
百瀬新治 …… 29

新発見！　オフネ祭り最古の古文書

逸見大悟

はじめに　オフネ祭りのはじまりについて

1　オフネと海とのかかわり

安曇野市内各地に伝わるオフネ祭りがいつ、どのようにして始まったのか、興味の持たれるところです。海のない安曇野で巨大な船形の山車が曳(ひ)かれて行く姿を見れば、安曇野は海とかかわりがあったのではないかとも想像してしまうことでしょう。[1]

毎年のお祭りで巨大なオフネが曳かれている穂高神社と住吉神社の御祭神も海の神です。さらに、九州北部からこの安曇野にやってきたといわれている古代の氏族・安曇氏（阿曇氏）に結びつける考え方もあります。安曇氏はもともと漁業や航海を生業としていたとされています。『日本書紀』に登場する「阿曇連頬垂(あづみのむらじつらたり)」「阿曇連比羅夫(あづみのむらじひらぶ)」などの人物は、朝鮮半島の国々との外交にも大きな役割を果たしていました。[2]

このように、「安曇（阿曇）」氏を名乗っている人々が海の仕事に携わっていたことや、穂高神社と住吉神社という、ともに市内では長い歴史を持つ神社が、どういうわけかともに海の神を祀っていること、そしてこの両社でオフネ祭りが行われていること、そういった要因を考えると、オフネ祭りの起源は海にあるのではないか、と考えたくもなるでしょう。

しかし、実際には海や安曇氏とオフネ祭りの関係性を裏付ける考古資料や古文書はなく、現段階で実証することは困難です。

2　神の依代(よりしろ)

一方で、『穂高神社史』を著した宮地直一氏は、水上を航行する船とのかかわりを否定しています。もともとは、祭りに先立って神霊をお迎えしたころの遺風であり、船形はお迎えした神霊を招代(おぎしろ)（依代）にのりうつらせるためのものだと説明しています。[3]また、穂高神社の御船祭りでは、現在も御船が神楽殿の周りを３周しますが、これも、神霊に降りてきてもらうための儀礼を形式化したものだと位置づけています。

3　他地域からの伝播(でんぱ)

さらに、オフネ祭りは他の地域から伝播したものとみる説もあります。このことには宮地氏も触れていますが、三田村佳子氏はより具体的に、諏訪大社のオフネ祭りが信濃国内各地へと広がっていった状況を紹介しています。[4]

諏訪大社下社で毎年８月に行われるオフネ祭りについていえば、江戸時代の延宝７年（1679）に現在とほぼ同じ形のオフネが確認できるといいま

---

(1) 「オフネ」の表記について。穂高神社では「御船」と表記していますが、他の地域では「お舟」「お船」「柴船」など、表記や呼び方も様々です。この文章では、総称で呼ぶ場合には「オフネ」を用い、穂高神社のオフネに限る場合は「御船」と表記させていただきます。

(2) 人名の読み方については、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（四）』（岩波書店・1995年）に拠りました。両人の事績について同書から例を挙げますと、阿曇比羅夫は舒明天皇の崩御に際し、百済からの弔問の使者の対応をしていますし、阿曇頬垂は皇極天皇の４年に起こった百済と新羅との戦闘について朝廷に報告しています。

(3) 宮地直一『穂高神社史』（1949年）112頁

(4) 三田村佳子『風流としてのオフネ―信濃の里を揺られゆく神々―』（信濃毎日新聞社出版局・2009年）

す。[5] 中世の諏訪大社は、信濃国では最も格の高い神社「一の宮」とされ、当時の古文書からも、信濃国内各地の郷村が同社に奉仕していたことがわかります。諏訪大社に関係する資料には、安曇郡の中にも諏訪の上社の行う祭りに奉仕していた郷村がみえます。おそらく江戸時代に入っても諏訪大社と郷村の関係は何らかの形で続いたのかもしれません。その関係で諏訪地方のオフネ祭りが安曇郡にも伝わってきたとしても不思議ではないでしょう。

今の段階では確実なところはわかりませんが、これからもさまざまな面から検証していくべき課題であり、興味は尽きません。

4　本論の課題――新発見の古文書から読み取れるオフネ祭り

冒頭で提起した「安曇野のオフネ祭りはいつから始まったのか」というテーマは、これからも追究していくべき課題であるとしても、「いつまでなら確実にさかのぼることができるか」という問題ならば、現段階での答えは見つけることができます。安曇野市域のことが書かれた古文書を探して、オフネ祭りの記述を見つけていくのです。そして、その古文書に書いてある内容によっては、当時のオフネ祭りの様子を垣間見ることもできます。

平成24年、豊科郷土博物館などを会場に秋季特別展「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」を開催しました。その準備を進めていくなかで、それまで最古とされていた安曇野のオフネ祭りの古文書よりもさらに古い時期に書かれた史料が見つかったのです。そこで本稿では、新発見の古文書の経緯や内容を報告したいと思います。

一　古文書から分かる江戸時代の御船祭り

1　これまで最古とされていた古文書

新発見の古文書を紹介する前に、これまで最古とされてきた古文書を見てみましょう。原本は漢文に近い形の文章で書かれていますので、読み下し文にして示します（史料1）。

この文書の原本は、事情により見ることができ

【史料1】

願い奉る口上の覚え

保高御宮　御祭礼船当番は、等々力村当番に御座候えども、等々力村の儀は他領罷り成り候に付き、船出だし申さず候。往古より船弐艘ずつ出来し候に付き、保高村・保高町・等々力町三ヶ村相談仕り、まず当年は等々力町にて如何様とも船出だし申したく存じ候。先例の通り船木・御幕御願い下し置かるべく候。

正徳五年未七月廿二日　等々力町　庄屋　喜左衛門
与頭　久兵衛
保高村　庄屋　孫三郎
与頭　伊兵衛
保高町　庄屋　作之丞
与頭　十左衛門

(5)　三田村氏前掲書39頁

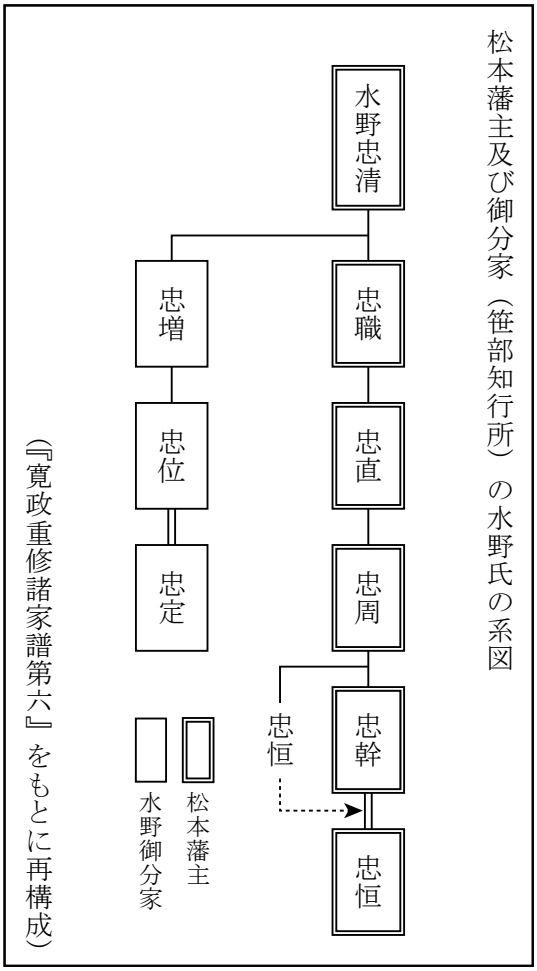
なかったので、青木治氏の著書に引用されている文面を読み下し文に直して掲載しました[6]。以下、この文書の内容について触れてみましょう。

2　文書の内容

この文書が書かれたのは、江戸時代中期の正徳５年(1715)です。等々力町･保高村･保高町の３ヶ村の庄屋と与頭（組頭とも書く）の６人の名前で、保高組の村々の庄屋たちを統括する組手代の丸山安右衛門に提出されました。

最初に題名として「願い奉る口上の覚え」とありますから、先の３ヶ村の庄屋と与頭は、組手代の丸山氏に何かを願い出たようです。

当時、穂高神社の御船は、毎年２艘出されていました。この文書が書かれる正徳５年までは、保高村・保高町・等々力村・等々力町の４ヶ村のうち当番の２ヶ村が、それぞれ１艘ずつ御船を出していました。ところが､等々力村は「他領」になってしまったため､御船を出さなくなってしまった、ということです。



松本藩主及び御分家（笹部知行所）の水野氏の系図

（『寛政重修諸家譜第六』をもとに再構成）

3　「水野御分家」領と等々力村

他領とは、松本藩以外の領地になったということです。当時、松本藩主は水野出羽守忠周が務めていましたが、笹部村や等々力村など安曇・筑摩両郡内の 11 ヶ村は、旗本の水野壱岐守忠定の所領となっていました。この家系は「水野御分家」と呼ばれます。

その御分家の初代である周防守忠増は、松本城主・水野出羽守忠職の弟で、松本藩主の家系から分家していました（系図参照)。江戸時代後期に編纂された大名や旗本たちの家系図である『寛政重修諸家譜』によれば、万治２年(1659)、兄である松本藩主の忠職から５千石を分けてもらっていました[7]。この５千石のなかには等々力村などの村々が含まれていましたが、この村々を実質的に支配していたのではなく、松本藩から５千石分の蔵前の籾を給されていたということです[8]。

その後幕府から丹波国や摂津国で領地を加増され、忠増の子・肥前守忠位の代には１万２千石の大名となりました。

正徳３年、忠位の養子として水野御分家を相続したのが壱岐守忠定でした。この年の９月、忠定は幕府に願い出て、摂津国に持っていた領地を信濃国筑摩郡内の領地と交換することを許されました。このときに領地に加わったのが、筑摩郡南部に位置する今井・大池・小坂・竹田・衣外・岩垂

(6)　青木治『安曇の歴史　穂高神社とその伝統文化』（1988 年）206 頁。原本は西大祝家文書。
(7)　『寛政重修諸家譜　第六』（続群書類従完成会・1964 年）60 頁
(8)　『松本市史　第二巻歴史編Ⅱ　近世』（1995 年）159・161 頁

の６ヶ村と旧高遠藩領南和田村。さらに現松本市四賀地区にあった金山町・殿野入・赤怒田・反町の「金山領」と呼ばれた４ヶ村もあり、合計11の村々でした。

さらに、前々より松本藩から蔵前の籾を給されていた11ヶ村・５千石分についても、翌正徳４年３月には実質的な支配が始まったようです。このことは、その村々の水帳や高辻帳、寺社帳などを松本藩から引き継いでいることから読み取れます。[9] この11ヶ村は、安曇郡の等々力、狐島、一日市場、七日市場、住吉、田尻の６ヶ村と、筑摩郡の笹部をはじめとする５ヶ村を指します。

また『土方本松本記』によれば、「正徳元年辛酉（かのとり）、御別家水野肥前守（忠位）殿、御加増御拝領、都合壱万二千石。大坂城御番お勤め遊ばさる。これにより松本領御分知五千石別段の御支配なされ、笹部御陣屋建つ。郡奉行・益田市右衛門（ますだいちえもん）支配なり。」とあります。[10] この文章ですと、笹部に陣屋が建てられたのが正徳元年なのか、水野忠定が相続する正徳３年より前なのか後なのかはっきりしません。正徳４年に松本藩から水帳などを引き継いだことも踏まえると、正徳３年か４年のころかと思われます。水野御分家はこの時期、筑摩郡や安曇郡の領地の直接支配を段階的に進めていったようです。

そこで史料１の内容に戻ります。水野御分家が安曇郡の６ヶ村を実効支配するようになった翌年の正徳５年、等々力村に御船の当番が回ってきたのですが、他領になったからという理由で御船を出すのを断ってしまった、というわけです。

先に掲げた正徳５年の文書は、等々力町以下３ヶ村が松本藩に願い出たものでした。等々力村に御船が出せないと言われて、「３ヶ村で相談した結果、昔から船を毎年２艘ずつ出してきたので、ともかく今年は等々力町で何とかして御船を出すことになった。ついては、今までのように御船を造る用材の伐採と船幕の使用を許可していただきたい」という内容を願い出ました。現存しているこの文書そのものは穂高神社関係者の控えです。原本は組手代の丸山氏を通して松本藩へ提出されたことでしょう。

4　その後の等々力村の御船

その後も等々力村は御船を出さず、他の３ヶ村だけで交替で御船を出して祭礼を行っていました。

享保10年（1725）に松本藩主・水野氏が改易（かいえき）され、翌年戸田氏が松本に入ります。すると水野御分家も領地替えを命じられたため、等々力村は他の３ヶ村と同様に松本藩領に編入されましたが、それでも等々力村は御船を出そうとしませんでした。その様子を記した古文書が史料２です。[11]

この文書を書いたのは、喜内（きない）と伊予（いよ）という、穂高神社の２人の神主でした。当時、保高組の組手代だった林太郎兵衛に宛てたお願いの文書の控えです。ここにも、正徳４年までは４ヶ村で御船を出していたこと、その後、等々力村が水野壱岐守の御領となり、御船を出さなくなったことが書かれています。ところが等々力村が再び松本藩領に戻ったからといって、また一緒に御船を出す形にはなりませんでした。２人の神主が等々力村に御船を出すように掛け合っても、承知しなかったというのです。そこで２人は保高組の組手代の林（はやし）太郎兵衛（たろべえ）にお願いして、等々力村に御船を出させてほしい、と依頼しました。このときに組手代だった林太郎兵衛は、等々力町の庄屋でもありましたから、[12] 神主たちも、林氏を頼るのが得策と考えた

(9)『長野県史　近世史料編　第５巻（一）中信地方』（1973年）397頁
(10) 水野家史料『土方本松本記』（早稲田大学図書館蔵）。なお、水野家史料は、松本市文書館において写真を確認しました。
(11) 東大祝家文書
(12)『南安曇郡誌　第二巻下』（1968年）96頁

【史料２】

願い奉る口上の覚え

一、当社御祭礼の儀、去る正徳四午年までは、保高村・保高町・等々力町・等々力村この四ヶ村にて相合わせ、船弐艘づつ毎年出だし申し候処に、等々力村の義、水野壱岐守様御領に罷り成り候故、残して三ヶ村相合わせ候て、船弐艘づつ例年出だし申し候。然る処に当年等々力村御一領に罷り成り候に付き、幸い今度先年の通り、三ヶ村へ加わり船弐艘づつ出だされ然るべしと私ども両度等々力村へ□□候て申し談じ候えども、いずれも承引これなく候。もっとも大切の御祭礼の儀に御座候えば、古例の通り、四ヶ村にて船弐艘づつ、毎年出だし候様に、願い奉り候。この段仰せられ下さるべく候。以上。

享保十一丙午年七月　　穂高宮両神主
喜内
伊予

林太郎兵衛殿

右は七月十九日御与手代処へ差し上げ候控えなり。

のでしょう。

二　安曇野市教育委員会の調査による発見

江戸時代に行われていた穂高神社の御船祭りについては、おおむね以上のようなことがわかっていました。これらのことを踏まえて、新発見の古文書について触れていこうと思います。

1　発見の経緯

安曇野市教育委員会では、市内各地に残る古文書の調査を行っています。穂高古文書勉強会の皆さんのご協力をいただきながら１点ずつ古文書の内容を確認し、目録にしていくという作業です。

平成24年度は、穂高の等々力家（屋号：本等）で所蔵されている古文書1,928点を調査しました。ちょうど、豊科郷土博物館でオフネ祭りの展覧会の準備をしている最中のことでした。穂高古文書勉強会の皆さんが調査した結果を取りまとめて確認する仕事をしている職員と話をしていたところで、等々力家文書に穂高神社の御船祭りについて書いた古文書があると聞いたのです。撮影した写真を確認すると、元禄２年(1689) ７月17日の日付が入っており、先に掲げた正徳５年の文書より26年さかのぼるものだということがわかりました。その古文書が次のページに示した史料３です。[13]

2　文書の内容

この文書の表題には「保高御宮御祭礼舟木注文の事」とあります。「注文」は現在でいうリストのことです。江戸時代、穂高神社の大祭礼は７月27日に行われていました。[14] もちろんこれは当時の暦の日付です。現在の暦に直せば、８月の終わりころになるでしょうか。この祭礼のときに御船が出されていたのです。

⑴　文書の登場人物

史料３の文書を出した人は等々力村の庄屋・孫左衛門と組頭の伝兵衛です。当時保高組の組手代であった等々力伝左衛門を通して松本藩の役人であった天野与市郎に提出されました。ただし等々

⒀　等々力家文書 Id62（口絵１頁もご参照下さい。）
⒁　青木氏前掲書190頁によれば、「江戸時代末までは、旧暦の七月二六日（宵祭）、二七日（本祭）であった」と記されています。

【史料３】

保高御宮御祭礼舟木注文の事

一、船一そう　　等々力村

この入り木

一、四本　長さ三間半　桧木　はね木

一、八本　長さ八尺　同木　ぬき木

一、四本　長さ八尺　同木　わく木

一、四駄　同木　くい木

一、五駄　雑木　なる木

右の通り、松川組天魔（てんま）が沢山（さわやま）にて下さるべく候。以上。

保高組等々力村

元禄弐年　庄屋　孫左衛門㊞

巳の七月十七日　与頭　伝兵衛㊞

組手代　等々力伝左衛門

天野与市郎殿

力伝左衛門は、柏原村の人物です。この文書自体は、等々力村の庄屋の等々力家に控えとして残されたものでしょう。

⑵　御船に使われた用材

では、本文の内容に触れてみましょう。元禄２年の穂高神社の祭礼には等々力村が御船を１艘出しました。先の史料２の文書にあるとおり、毎年２艘ずつ出してきたということであれば、ほかの村からもう１艘御船が出ていたはずです。

御船を１艘造るのに、長さ３間半（約 6.3m）の刎木（はねぎ）を用いています。また、「ぬき木」「わく木」というのは、現在は使われていない言葉なので断定はできませんが、その長さと本数から、御船の櫓（やぐら）を組み立てるのに使用するものかと思われます。すなわち、「わく木」は４本であることから、縦に使う用材、「ぬき木」は「わく木」同士をつ

なぐ横木というわけです。8尺(約2.4m) 四方の櫓を組み立て、そこに刎木を斜めに取り付けて、御船の骨格ができあがります。

「なる木」は御船の腹を形作る用材です。「くい木」は何を指すのか不明です。「なる木」が「雑木」とされているのは、たわめて使う必要があるためでしょう。「くい木」は刎木などと同じように、まっすぐな桧です。おそらく御船の腹以外の部分に用いて形を整えたり足場としたりする木ではないかと思います。

いずれにせよ、当時の御船にはまだ車輪がなく、担ぎ船でした。3間半もの刎木を持つ船といいますから、現在の穂高神社で曳行される大人船にもひけをとらない大きさであり[15]、重量も相当なものであったと想像されます。

三　ここまでの疑問

さて、ここまでいくつかの古文書を見てきて、いくつかの疑問が湧いてきます。

そのひとつは、そもそもどうして等々力村は他領になったからといって御船作りをやめてしまったのか。またもう少し小さな疑問として、先に述べた松本藩の役人・天野与市郎とはどのような人物か、さらに「天魔が沢山」とはどこのことを指すのか、ということです。これら3つの疑問は、実はつながってくるのではないかと思います。そのことについて、順を追って説明しましょう。

1　「天野与市郎」という人物

実は、天野与市郎という人名は、松本藩の藩士の名簿である分限帳のうち、現存するものからは発見することはできませんでした。

(1)「天野与一郎」・「天野与市」

ただ、他の史料から「天野与市」「天野与一郎」などという人名を見つけることができました。それは、越後高田城の警護のために松本藩などの近隣の諸藩が派兵した際に、「御駄賃払」として働いているということです。「天野与市」「天野与一郎」とも同じ時に同じ「駄賃払」として明記されていることから、同一人物とみて間違いないでしょう[16]。

このときの高田城の警護というのは、高田藩の改易に伴うものでした。延宝7年（1679）から9年にかけて、越後高田の松平家家中では、藩主・越後守光長の跡目をめぐって、家臣たちが2派に分裂して抗争を始めてしまいました。それが幕府内の審議にも持ち込まれましたが、決着がつかなかったため、将軍・徳川綱吉自らが裁定を行うことになったのです。結果、松平光長はお家騒動の責任を取らされて改易となり、騒動に当事者としてかかわった家臣たちは切腹や遠島を命じられます。高田藩の城と領地も没収されることになりました。このため近隣諸藩が高田城受け取りの軍勢を派遣することになったのです。

延宝9年7月、松本藩も軍勢を調え、高田城警護のために出発しました。このとき伊藤半兵衛と「天野与一郎」の両名が、山上図書ら家老衆から、高田城の警護に出向いた松本藩士たちに駄賃銭を滞りなく配分するように命じられています[17]。

しかし天野与市郎と思われる人物が史料上に登場してきたとはいえ、高田城の警護のような任務は臨時のものです。普段どのような仕事をしていたのかはわかりません。

---

(15) 穂高人形・御船祭保存会編『穂高人形のつくり方《穂高人形飾り物・御船祭り手引書》』（2003年）52頁によれば、大人船のはね木の長さは両町区が6m86.3cm、穂高区が6m66.6cmである、とあります。

(16) 水野家史料のうち『大坂・高田・高遠・日光等書類　上』には「天野与市」という表記、『越後高田城御在番之記　上』には「天野与一郎」の表記が見えます。

(17) 水野家史料『越後高田城御在番之記　上』

⑵ 「天野忠左衛門」の家柄

そこで水野家に関する史料から同じ天野姓の人物はいないかと探していくと、天野忠左衛門なる人物が度々登場します。先の高田城派兵のときも忠左衛門は松本藩の行列に加わっています。

さらに、『御大変之砌　水野隼人正家中分限帳』や『役録帳　上』など、水野氏が改易された享保10年ころに書かれたと思われる家中の分限帳には、水野頼母という重臣の組下で、禄高130石として天野忠左衛門が登場します。[18]

ただし、水野氏が改易されたのは、高田城派兵の44年もあとのことです。延宝９年に登場する天野忠左衛門と、享保10年ころにみえる天野忠左衛門は同一人物ではないかもしれません。

そこで上記の分限帳や『役録帳』から忠左衛門と同格の藩士をみてみます。分限帳には「百弐拾石　保高松川代官　松林所左衛門」、「百弐拾石　塩尻出川代官　稲葉伝左衛門」などの記述が見えますし、『役録帳』には「百弐拾石　保高松川代官・鳥役　吉江内左衛門」「百弐拾石　大町与代官　浜崎久左衛門」という人物もみえます。

以上より、天野忠左衛門と同程度の家柄ないし禄高の藩士たちが交代で領内の各組の代官を行っていたと考えられます。ということは、先の元禄２年の文書に登場する天野与市郎も、当時保高組と松川組の代官を務めていたのではなかったかと推測されるのです。

分限帳には必ずしも藩士全員の名前が書かれているわけではありません。ほとんどがそれぞれの家の当主です。水野家の家中で、組代官を務められる同格の家柄では、天野姓はこの忠左衛門の家だけです。ですから高田城警護の際に駄賃払を務めた天野与一郎は、天野忠左衛門家の跡取りであったと考えられます。与一郎は元禄２年の時点で保高松川代官という立場で等々力村の御船の用材の伐採の願い出を処理した、そして享保10年の段階では忠左衛門という、先代と同じ名前を襲名していたと考えられます。

2　「天魔が沢山」での木材採取

さて、元禄２年の文書では、等々力村は木材を「天魔が沢山から切り出させてください」と願い出ています。現在の天満沢付近の山林と考えられます。では、なぜ天満沢山から木材を取っていたのでしょうか。

『南安曇郡誌』によれば、文化年間に天満沢山を管理していた山元村は新屋村でした。入会として薪や肥料となる刈敷を採っていたのは橋爪・富田新田･耳塚･嵩下の４ヶ村、何れも松川組の村々です。[19]

一方、御船を出していた村々が入会に入っている山はそれぞれ次の通りでした。保高村が牧の赤嵐山（ただし保高村田中のみは浅川山）、等々力･等々力町・保高町の３ヶ村は嵩下村が山元として管理する藤尾山です。

以上から天満沢山と、入会の山・村との関係は見出すことができませんでした。

ただし、等々力村などの保高組の村が他の組の管理下にある山で木材を伐採する場合、天野与市郎のような、松本藩が任命した組代官に届け出る必要があったということは了解しておきましょう。

3　等々力村はなぜ御船をやめてしまったか？

それでは、以上のようなことも踏まえて、等々力村がなぜ御船を出すのをやめてしまったかを考えてみましょう。

実は、等々力家文書を調査するなかで、その原因がわかる文書も出てきたので、11ページの史

⒅ 水野家史料『役録帳　上』、『御大変之砌　水野隼人正家中分限帳』
⒆ 『南安曇郡誌　第二巻下』321頁

料４でご紹介します[20]。

３ヶ条にわたってしたためられたこの文書は、享保13年(1728）のものです。すでに松本藩主は戸田氏に替わっていますが、水野氏時代からの御船祭りの経緯が書かれています。これも願い上げの文書で、書いたのは等々力村の庄屋・理兵衛（りへえ）と組頭・弥兵衛（やへえ）です。宛先は大庄屋（水野氏時代には組手代と呼ばれていた）の等々力勘左衛門となっています。

⑴　文書の内容

まず、第１条目には、このときから15年前の正徳４年午の年に「御分郷」つまり等々力村が水野御分家の領地に編入されたことが書かれています。分郷となったために、翌正徳５年未（ひつじ）の年、等々力村に御船を出す順番が回ってきたけれども、御船の用材の調達や船幕を借用する手だてがなくなってしまいました。このため「木の葉風流」といいますから、葉の付いた木の枝を切ってきて御船の形に取り繕って担いだのかもしれません。あるいは、神の依り代となる常緑樹だけ、持つか担ぐかして穂高神社の境内を練ったのかもしれません。

さらにその翌年、享保元年（正徳６年・1715）のことが第２条に書かれています。前年に御船が出せなかった等々力村は、等々力町村と共同で船を出そうと考えます。初めは穂高神社の神主も等々力町村の庄屋も同意しますが、あとで神主から証文を出すようにと言われます。等々力村以外の３ヶ村は証文の下書きを提出しているから、という理由でした。等々力村の人々としては「気の毒」（当時の言葉で、自分自身がつらい思いをしているという意味）なので、証文の提出は免除していただきたいとお願いしますが、聞き届けてもらえませんでした。

村内で相談した結果、御船は出さないことになりました。その理由には２つあります。ひとつは「証文を出（い）だし、船相合わせの儀は神事にがまんの儀に御座候（ござそうら）えば」、ここは意味が取りにくいのですが、自分たちで御船の用材や幕の調達も満足にできないのに、証文を出して、他の村に便乗してまで御船を出すのは、神様に対してわがままで失礼なことだ、という内容だと思います。

もうひとつの理由は、3ヶ村が書いた証文には、たとえ等々力村が御船を出さなくても、３ヶ村で御船を出すと定められていることが挙げられています。

そして第３条目。ここには領主が戸田氏に替わってから、現在までのことが書かれています。享保11年午（うま）の年、松本藩の代官から御船を他の村と合わせて出すようにとの指示が出ます。おそらく、先に掲げた享保11年に「穂高宮両神主」の喜内と伊予が書いた文書（史料２）が、保高組大庄屋の林太郎兵衛を通じて松本藩に提出されたため、代官がこれを受けた形で等々力村に命じたのだと思います。

等々力村が御船をやめてからすでに十数年が経ち、村の者たちも「慣れざる百姓」と言っているように、御船を造る伝統や技術が廃れてしまっていたようです。そのため、これまでのように小旗と「さんがい」をもって「風流（オフリョウ）」とさせていただきたい、と改めて願い出ているということです。

⑵　等々力村「分郷」と御船の廃絶

等々力村が御船をやめてしまった最初の理由は、やはり「分郷」にあるようです。

元禄２年の文書からわかるように、等々力村は御船の用材の調達に松本藩領内松川組の山中へ行って木を伐（き）ってきました。その願い出は保高組と松川組を担当する組代官へ提出していたのです。

正徳４年に実質的に松本藩領でなくなってし

---

⑳　等々力家文書 Inb‘238（口絵２頁もご参照下さい。）

まった以上、松本藩の組代官に願い出ることもできず、かといって笹部の陣屋に願い出ても、用材を伐る山は水野御分家の管理下にはありません。

結局、「船相合わせ」という選択肢しかないのですが、等々力村は御船を出さない決断をしました。その理由としての「気の毒」とか「神事にがまん」という文言からは、感情的に釈然としない部分が見え隠れしているようです。史料４からは、等々力村の人々が、他の３ヶ村や穂高神社側の要求を呑むことができずに苦慮している様子が感じ取れます。

四　今後の展望――まとめにかえて

安曇野市教育委員会の古文書調査の成果として、これまでよりもさらに古い時代の御船祭りの古文書がみつかりました。現存最古ということは、

【史料４】

恐れながら願い奉る口上書の事

一、保高御宮祭礼に付き、申し上げ候儀は、当拾五年以前、午の年（正徳四年）御分郷に相成り、午の年は等々力町の船番に御座候。未の年（正徳五年）は等々力村の船番にて御座候ところに、船木・御幕致すべき様御座なく候故、木の葉風流にて祭礼相済まし申し候御事。

一、申の年（享保元年）は船相合わせ出だし申したく存じ奉り、神主を頼み等々力町へ船相合わせ申したき義願い申し候ところに、等々力町にてもっともと請け申し候えて、その段神主方より等々力村へ申し聞かせ候故、等々力村の役人・長百姓、等々力町庄屋喜左衛門方へ船相合わせくれ候段、礼に参り候ところに、あとより神主方へ等々力村の役人呼び寄せ、神主申し候は、今度船相合わせに付き、三ヶ村より証文の下書き出だし候。神主申し候は、かくの如く証文致され、船相合わせ成さるべく候と申し候。証文出だし候儀は気の毒に存じ候て、証文なしに船相合わせくれ候わけ、またまた神主を頼み等々力町へ申し候えども、証文なしには船相合わせ申す義、罷り成らずと申し候故、郷中相談仕り候ところに、証文を出だし、船相合わせの儀は神事にがまんの儀に御座候えば、船相合わせ申す儀、仕らず候。等々力村にて船相合わせ申さず候えても、保高村・保高町・等々力町三ヶ村にて弐艘の船は永々出だし申すはずに証文の下書きに御座候。この義に付き、三ヶ村へ毛頭意趣意恨御座なく候御事。

一、去る午の年（享保十一年）、御代官様より船相合わせ候様にと仰せ付けられ候えども、成れざる（慣れ）百姓年々に支度仕り候小ばた・さんがい、これを捨て船相合わせの義、迷惑至極に存じ奉り、御訴訟申し上げ置き候。またまた今年船相合わせ候様に仰せ付けられ候えども、成れざる百姓に御座候えば、お請け申す義成り難く存じ奉り候間、何分にも御訴訟申し上げ候。

右の趣、恐れながら聞こし召し分けられ船相合せの儀、御赦免遊ばされ、前々の通り小幡風流に仰せ付けられ下し置かれ候わば、有難く存じ奉り候。已上。

保高組等々力村庄屋　理兵衛　㊞
与頭　弥兵衛　㊞
惣百姓中　㊞

享保十三年申七月

等々力勘左衛門殿

それだけでも意味はあるのですが、この文書の内容はわからないことばかりで、筆者もどのように位置づけてよいのか苦慮してきました。

一応、他の古文書とつきあわせてみていくことで、近世穂高神社の御船祭りの一端が見えてきたかと思います。その意味でひとつの端緒を与えてくれた文書でした。

しかし未だにわからないことが数多く残されています。その大きなもののひとつに、当時の御船がどのような形をしていたのか、ということがあります。元禄２年の文書にも「ぬき木」「くい木」などの言葉が見えますが､それがどういうものか、まだ見当がつきません。

また安曇野のオフネ祭りはいつから始まったか、という問題も白紙のままです。宮地・三田村両氏の説に従えば諏訪大社のオフネ祭りの伝播とも言われていますが、それがなぜ伝わったのか、安曇野の歴史を解き明かしていく上でもより明らかにしていく必要があります。

私たちは、現在の状況と昔の人が書いた古文書との間を行き来しながら、これからも祭りの歴史の旅を続けなければならなくなりそうです。

最後に、本論をまとめるにあたり、等々力家御当主・等々力孝志様、等々力家住宅を管理されている等々力威生様、穂高神社の皆様、松本城管理事務所の後藤芳孝様、松本市博物館及び松本市文書館の皆様、穂高古文書勉強会の皆様など、多くの方々にご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

関連年表

年号	西暦	松本藩・水野御分家関係	松本藩主	水野御分家
寛永 19	1642	○7.28. 水野隼人正忠清、三河国吉田より信濃国松本に転封せられ、安曇・筑摩両郡内に7 万石を領す。	水野 忠清	
正保 4	1647	○5.28. 忠清没す。8.21. 出羽守忠職、遺領を相続。	忠職	
万治 2	1659	●12.23. 水野周防守忠増に新田分5 千石を分かち与える（水野御分家の分出）。		水野 忠増
寛文 8	1668	○6.26. 忠職没す。8.21. 隼人正忠直、遺領を相続。	忠直	
延宝 9	1681	○6.27. 松本藩、越後高田城の警護のため軍勢を派遣。天野忠左衛門・天野与一郎ら随行。		
天和 2	1682	●4.21. 忠増、幕府より丹波国氷上郡内に2 千石の領地を与えられ、すべて7 千石を領す。		
貞享 3	1686	○10.14. 中萱村加助ら一揆勢、郡奉行あてに年貢収納改悪に対する訴状を提出（貞享騒動）。		
元禄 2	1689	○7.. 等々力村、穂高神社大祭礼にあたり、船木の伐採を松本藩・天野与市郎に願い出る。【史料3】		
元禄 7	1696	●7.6. 忠増没す。8.30. 肥前守忠位、遺領を相続。		忠位
正徳 1	1711	●9.5. 忠位、大坂城定番となり、摂津国島上、嶋下、豊嶋郡内に5 千石の領地を与えられ、すべて1 万2 千石を領す。		
正徳 3	1713	○5.28. 忠直没す。6.22. 出羽守忠周、遺領を相続。 ●7.19. 忠位没す。9.16. 壱岐守忠定、遺領を相続。 ●9.23. 忠定、摂津国内5 千石の所領を信濃国筑摩郡内に移さる。	忠周	忠定
正徳 5	1715	○7.22. 保高・保高町・等々力町、穂高神社の祭礼にあたり、当年はこの３ヶ村にて御船を出したい旨を願い出る。【史料1】		
享保 3	1718	○10.28. 忠周没す。11.21. 日向守忠幹、遺領を相続。	忠幹	
享保 8	1723	●3.6. 忠定、若年寄となる。 ○5.10. 忠幹没す。7.5. 隼人正忠恒、遺領を相続。	忠恒	
享保 9	1724	○12..『信府統記』編纂される。		
享保 10	1725	○7.28. 忠恒、江戸城中にて乱心し、毛利主水正師就に刃傷に及び、領地を没収される（松本大変）。 ●10.18. 忠定、信濃国内の領地を召し上げられ、安房国安房・朝夷・長狭、上総国市原、丹波国氷上の5 郡の内に1 万2 千石を領す。 ○10.18. 戸田孫四郎光慈、志摩国鳥羽より信濃国松本に転封せられ、安曇・筑摩両郡内に6 万石を領す。	（幕府領） 戸田 光慈	
享保 11	1726	○7.. 穂高神社両神主、祭礼にあたり等々力村に御船を出してもらえるよう、保高組大庄屋・林太郎兵衛に願い出る。【史料2】		
享保 13	1728	●7.. 等々力村庄屋ら、保高組大庄屋・等々力勘左衛門へ穂高神社祭礼の御船について願い出る。【史料4】		
享保 17	1732	○8.11. 光慈没す。10.15. 織之助光雄、遺領を相続。	光雄	

○…松本藩主・水野家及び戸田家の領内でのできごと
●…水野御分家及びその旧領でのできごと

安曇野市のオフネ祭りの現状と特別展
「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」の活動報告

宮本尚子

はじめに

本稿は平成24年10月20日から12月2日まで開催した「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」（以下「お祭り展Ⅰ」）にともなう市内オフネ祭りの調査による祭りの現状報告と、展覧会活動についてまとめたものです。

「お祭り展Ⅰ」を開催する契機となったのは、当館が、平成24年4月1日に、それまでの指定管理者であった財団法人豊科文化財団（現公益法人安曇野文化財団）による運営から、安曇野市教育委員会運営の博物館としてスタートしたことにあります。

それまでも年に数回開催している特別展や博物館講座では市全体を見渡すテーマや資料を取り扱ってきたものの、常設展の展示資料は創立[(1)]した際に収集した旧豊科町のものがほとんどで、いまだに「豊科の博物館」という認識を持っている市民も少なくありません。市による直営化は、より一層安曇野市全体を網羅する充実した資料で教育普及活動を展開するという意識が高まった結果です。

そこで、どのようなテーマの展示ならまさしく「安曇野らしい」のかを考え、市内の特徴的な祭りを核とした企画展を計画しました。安曇野市で行われる祭りの多くは、オフネなどの出し物や道祖神といった共通点を持ちながら、地域性と多様性に富んだ興味深いものが多くあります。

この計画を「安曇野のお祭り展」として企画案を作成し、平成24年度文化庁文化芸術振興事業「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」に応募したところ、新博物館体制のスタートとほぼ同時に、申請に対して交付決定の通知がありました。

文化庁の補助事業交付決定を受けたことで、事業に合致する方向で、ミュージアム活性化支援事業も含みつつ企画展を構想することとなりました。この補助事業は3ヵ年継続実施での申請だったので、それに対応するため1年目をオフネ祭り、2年目を道祖神祭り、3年目をその他の祭りと区分けし、3ヵ年継続実施の展覧会を考えることとしました。

初年度のお祭り展にオフネ祭りを位置づけたのは、オフネ同士が豪快にぶつかり合う穂高神社御船祭りを筆頭に、オフネの登場する祭りが安曇野を代表する祭礼として広く知られているからです。展覧会では、穂高神社のみならず、市内の地区や神社ごとのバラエティーに富むオフネ祭りを紹介することができます。このお祭りを継承し実施するなかで、住民の絆が深まったり、地域の活性化にもつながっている例が認められることも、まずオフネ祭りを取り上げた根拠となりました。

一　安曇野のオフネ祭りの現状

1　オフネとオフネ祭りとはなにか

展覧会を開催するにあたり、安曇野のオフネとは一体どういうものなのか、何をもってオフネとするのかを考える必要がありました。

(1)　当館は昭和54年（1979）4日、豊科町郷土博物館として開館。

市内の神社などで行われる祭典で登場する舟形の出し物には、①　穂高神社御船祭りで曳かれるオフネとほぼ同様の形態のもの、②　二階建て櫓の山車の前後、或いは前方か後方のみに刎木を斜め上方に張り出し、幕を掛けて舟形にしたもの、そして車輪があり綱などで曳く①、②とは異なり、③　担ぐかたちのものがあります。

呼び方もさまざまで、①、③は御船、お船、お舟、舟、柴舟、担ぎ舟など、「フネ」という言葉がみられます。②は舞台、屋台、山車などでフネを連想させる呼び方ではありませんが、これらすべてをオフネとして分類しているのが、三田村佳子氏です。[(2)] 三田村氏は、名称に関わらず、形態や伝播の歴史などからオフネを分類しています。

以下、写真で紹介しますが、三田村氏の分類では、①を「穂高・池田型」、②を、松本市里山辺の須々岐水神社のお船祭りに登場するオフネを代表とした「里山辺型」としています。「里山辺型」のオフネは、市内では松本市に近い犀川流域で曳かれていることが確認できました。③は市内では１か所の祭りでのみ登場しているもので、岩原山神社(堀金烏川)の担ぎ舟です。この担ぎ舟は「諏

《穂高神社御船構造（両町区大人船）》
車輪のついた櫓に腕木・刎木をとりつけ、雑木を格子状に編んだナルを「ハラ」とし、幕で覆う。
御船の上部は「山」といい、「穂高人形」と呼ばれる等身大に近い木偶（人形）と蚊帳や松、杉、桧、背景を描いた書割などで表現した歴史の一場面などが作られる。

《「穂高型」矢原神明宮こども船》

《諏訪大社下社　お舟祭りのお舟》

《「諏訪型」岩原山神社の担ぎ舟》

《須々岐水神社のお船（西牧尚人氏撮影）》

(2)　三田村佳子（2009）『風流としてのオフネ　信濃の里を揺られゆく神々』　信濃毎日新聞社　27 ～ 29 頁

訪型」とされ、諏訪大社下社のお舟祭りのオフネに代表されるものです。

そこで、「お祭り展Ⅰ」でも名称に関わらず舟形の出し物をすべてオフネとし、オフネの登場する祭りをオフネ祭りとして紹介することとしました。

《「里山辺型」熊倉春日神社（豊科高家（たきべ））のお舟》
山車の前後に刎木を付け、幕を張る

《「舳先（へさき）型」新田神社（豊科）の山車》

《「艫（とも）型」（「前方艫型」）本村神社（豊科）の山車》

2　安曇野のオフネ祭り

(1)　オフネ祭りをめぐるこれまでの動き

こうして、2012年春から秋にかけて催行されたオフネ祭りの調査を行いました。この調査には、館職員のほか、博物館友の会郷土史部長で市文化財調査委員でもある西牧尚人氏にも協力をしていただきました。

オフネ祭りは主に春と秋に市内各地の神社で催行されますが、限られた週末にいくつかの祭りが集中することもあるため、人手が足りず、残念ながら調査が行き届かなかったこともありました。後の章で紹介しますが、記録等では確認したオフネがすでに造られなくなっていたり、造られなくなったかと思われていたオフネが、復活、或（ある）いは違う祭りで登場していたり、展覧会開催の直前までオフネの実数を把握（はあく）できず、調査期間の短さと、展覧会までにしなければならない作業の多さを痛感しました。

しかし、調査の結果、市内31か所の神社の祭礼で、43艘のオフネが登場しているということがわかりました。

では、安曇野のオフネ祭りとはどのようなものなのでしょうか。

今まで、網羅（もうら）的な調査がされていなかったオフネ祭りですが、その重要性が見逃されていたわけではありません。いくつかのオフネ祭りが長野県や市の無形民俗文化財として指定されています。

県無形民俗文化財に指定されているのは、穂高神社の御船祭り[3]です。毎年9月26日、27日に開催され、県内外からも大勢の観光客が訪れる盛大な祭りです。

また、市でも平成23年までに、特徴的なオフネ祭りとして、蝋燭（ろうそく）祭りともいわれる潮神明宮（うしおしんめいぐう）例大祭（明科東川手（ひがしかわて））、巨大なオフネが登場する重柳（しげやなぎ）八幡宮例大祭（豊科南穂高）や中萱（なかがや）熊野神

(3)　長野県指定無形民俗文化財としての名称は「穂高神社の御船祭りの習俗」

社例大祭（三郷明盛）、２艘の「穂高型」のオフネが登場する住吉神社例大祭（三郷温）の、４つのオフネ祭りを無形民俗文化財として指定しています。

平成24年にはさらに岩原山神社(堀金烏川)と、荻原神社（明科七貴）のオフネ祭りが新たに指定を受けています。(4)

⑵　伝統的なオフネ祭り

無形民俗文化財として指定を受ける､受けない、或いは祭りの規模などにかかわらず、多くのオフネ祭りに共通することとして、１日目は夕方から始まる宵祭りがあり､2日目は本祭りを行うこと、「オフリョウ」や「オフリョウを渡す」という神事が行われることが挙げられます。

「オフリョウ」は「御布令」､「御風流」と表記し、「御振苧」、「御風料」、「御振料」、「御振穂」などから転化したとも考えられています。(5) しかし､「オフリョウ」とは一体何か、大勢の研究者がその謎について考えていますが、はっきりとした答えは出ていません。また、オフリョウ神事はオフネ祭りに限らず、ほかの祭りでも行われます。

オフネのかたち、祭りの行い方、オフリョウを渡す方法など、詳細な内容は祭りごとに特徴があり、ひとつとして同じ祭りはなく、安曇野のオフネ祭りの多様さが伺えます。では、いくつかののオフネ祭りについて見ていきましょう。

穂高神社御船祭り　祭礼日　９月26日、27日

穂高神社御船祭りの祭礼日は毎年変わることはありません。穂高区からは大人船１艘、子供船１艘、両町区（穂高町区と等々力町区）から大人船１艘、穂高町区から子供船１艘、等々力町区から子供船１艘の合計５艘のオフネが登場します。

26日夜、関係者が参列し、拝殿で神事が執り行われます。その後、等々力区のフリョウ燈籠を先頭に各地区の代表や氏子総代が神楽殿を時計回りに３周し、オフリョウが渡されます。オフネは参集殿前の広場（南神苑）でライトに照らされ、祭りに訪れた人々にお披露目されます。翌27日の本祭りでは、一度各地区に帰ったオフネが再び南神苑に集合します。この日は鼠穴（北安曇郡松川村）の代表が持つ、赤地に白の三階菱（松本藩主であった小笠原氏の紋）が染め抜かれた旗を先頭に、布令旗を持った11地区の代表が神楽殿を３周し、オフリョウが渡されます。

《本祭りのオフリョウ渡し》

続いて小学生や保護者などに曳かれた子供船３艘が、等々力町区、穂高町区、穂高区の順に社庭に入ってきます。子供船がそれぞれ神楽殿を３周した後、大人船の登場となります。先ず、両町区が１周したところへ穂高区の大人船が登場し、御船祭り一番の見どころとも言えるオフネ同士の激しいぶつかり合いになります。この時、ハラ部分に掛けられていた子どもの晴れ着は取り払われていますが、囃子方の子どもたちはオフネに乗ったままで演奏を続けます。数度のぶつかり合いが終わると、オフネは鳥居から出て行き、祭りも終わりとなります。

⑷　市指定無形民俗文化財としての名称はそれぞれ「潮神明宮の柴舟と人形飾り物」､「重柳八幡宮祭り舟」､「熊野神社のお船祭り」､「住吉神社のお船祭り」､「岩原　山神社のお舟祭り」､「荻原神社のお船祭り」

⑸　青木治（1988）『穂高神社とその伝統文化』　穂高神社 231 ～ 232 頁

《オフネ同士の激しいぶつかり合い》

《潮神明宮のオフネ》

潮神明宮例大祭　祭礼日　5月5日

明科の潮神明宮のオフネ祭りは江戸時代中期まで遡る長い歴史があります。(6) 祭りは潮神明宮祭典保存会が中心になって行われており、宵祭り、本祭りともに大小2艘の柴舟（壱号、弐号）と呼ばれるオフネが曳かれます。他の穂高型のオフネと違い、ハラ部分を覆う幕は垂れ下がるのではなく、ハラを包み込むようになっています。また、蝋燭祭りの異名を持つこのオフネ祭りの特徴は、宵祭りの曳きフネにあります。宵祭りでは、オフネの船縁には数えきれないほどの蝋燭が赤々と灯され、木偶や柴、蚊帳などで飾り付けられた歴史絵巻を、夜の闇に浮かび上がらせるのです。

潮では木偶作りも地元で行われています。また、他の多くの祭りでは子どもがオフネの囃子方となりますが、このオフネ祭りでは大人が囃子方となり、子どもはオフネではなく舞台に乗って御囃子を演奏します。

宵祭り、夕方暗くなる頃、オフネは犀川にかかる木戸橋近くから出発します。大勢の氏子総代や氏子伍長などが行列の先き立ちとして提灯を持ち、オフネを先導します。オフネは国道19号線を通り地区内を曳行されます。沿道の家の軒先には提灯が掲げられ、大勢の人々がオフネの曳行を見守ります。壱号のオフネは潮交差点を左折し、境内へ向かいます。弐号のオフネはそのまま国道を南下し、会田川橋まで曳行し、そこから引き返します。2艘のオフネは参道に造られたみかん燈籠の鳥居の手前で合流し、境内へと入ります。境内に入ったオフネは、周回などはせず、お披露目されます。

氏子総代や伍長たちの提灯行列はオフネと別れた後、旧明科法務局辺りから舞台とともに神明宮を目指します。子どもたちの乗った舞台が境内に到着すると、行列だけが境内の舞殿の周りを3周し、神事が執り行われます。その後、歌謡ショーやマジックショーなどの余興が始まります。出店や人出も多く、盛大な宵祭りとなります。

境内にも木偶や柴、蚊帳などで飾り付けられた飾り物が造られています。

本祭りでは、一旦木戸地区に帰ったオフネが再び地区を曳行されます。境内に入る際、オフネは勢いよく鳥居をくぐります。1艘目のオフネが入り、境内の南側へ据えられると2艘目のオフネが同様に勢いよく境内へ入ってきます。境内に千度石はなく、2艘目のオフネのみをあおりながら、オフネ自体を右回りに3周回します。

行列は宵祭りと同様、舞台とともに境内に入り

(6)『明科町史　上』 982頁

ますが、提灯ではなくサンガイ(7)と呼ばれる飾り物を掲げます。舞台と行列が境内に到着すると、宵祭りと同じように舞殿を3周し神事が行われます。

《舞台とサンガイを掲げた行列》

重柳八幡宮例大祭　祭礼日　秋分の日

重柳八幡宮では宵祭りには燈籠で飾られた屋台（舞台とも呼ぶ）が地区を曳かれます。この日、オフネは大日堂（公民館）前の消防団詰所の広場でライトアップされ、お披露目されます。

境内に到着した屋台は千度石を３度回り、拝殿の前で御祓いを受けます。

本祭りではオフネが大日堂を出発、田園の中を曳かれ東の伊勢宮へ行き、そこから再び大日堂を通り、西の万水川傍（よろずいがわばた）まで行ってから八幡宮へと戻ります。全長 15m のオフネが揺られ行く様は遠くからもよく見ることができます。

《重柳八幡宮でのオフレ》

八幡宮に到着したオフネは千度石の周りを３度周り、「オフレ（オフリョウ）」となります。その後「アオリ」といってオフネを前後に 100 回以上激（はげ）しく揺（ゆ）らします。この間囃子方の子どもたちの演奏が止むことはありません。「アオリ」が終わると境内を１周し、オフネは大日堂へと戻っていきます。

岩原山神社のお船祭り　祭礼日　４月第４日曜

岩原山神社のオフネは先にも紹介したとおり、市内で唯一「諏訪型」で、担ぐオフネです。

オフネは舟張り場と呼ばれる場所で、祭りの２週間ほど前に造られ、本祭りのみで担がれます。オフネの材は桧で、舟を飾るのは桧等の柴と太く編んだ綱（つな）と幕です。桧は区有林から伐り出されます。

本祭りの日、午前 11 時ころ、オフネは子供舟、大人舟の順に舟張り場を出発し、山神社へ向かいます。お囃子はなく、太鼓を叩きます。子どもたちが太鼓を叩きながらオフネを先導します。

途中、烏川岸の渡し場と呼ばれる場所にある「センド（舟渡）石」の周りを子供舟、大人舟の順に３周します。ここは、かつて栗尾山満願寺へと向かう栗尾道の入り口で舟の渡し場だった場所です。

神社入り口に到着すると、子供舟はそこで終わりとなり、大人舟だけが境内へ入っていきます。

山神社は境内全体が斜面となっており、その中ほどにもセンド石があります。オフネはここでもセンド石の周りを３周し、オフリョウが渡されます。この時、氏子総代などがオフネを先導しますが、この行列の先頭を行くのが、牧地区の代表が持つ幟旗（のぼりばた）です。

山神社の神様はもともと烏川を挟んで対岸上流の牧（穂高牧）の神様で、昔、大水があった時に烏川を流れてきたものを岩原で引き上げ祀（まつ）ったといわれています。そのため、この祭りでは牧は別

(7)　三階。　松本藩主であった小笠原氏の紋の三階菱と考えられている。『明科町史　下』 664 頁

《オフネを先導する牧村大明神の幟旗》

格の客分とされ、牧の幟旗が到着しないと決して始まらないのだといいます。

オフリョウが渡されると、オフネは担ぎ手によって境内の斜面を豪快に放り投げられます。数回放り投げると、オフネは参道まで転げ、刎木は折れてしまいます。壊されたオフネは来た道を担がれて舟張り場へと戻っていきます。

《オフリョウ渡しの後、壊される大人舟》

以上、穂高神社、潮神明宮、重柳八幡宮、岩原山神社の4つオフネ祭りについて、その流れを見てみました。オフネの形態もさるものながら、祭りの進め方、オフリョウを渡すということなどに多様性があることがわかります。

⑶　祭りから消えたオフネ

43艘のオフネが現在まで伝えられる一方で、オフネが登場しなくなったと考えられる祭りが20以上あります。[8] また、一度オフネが絶えたものの復活した祭りもあります。二つの祭りを例に、オフネ祭りを続けることの難しさを見ていきましょう。

小岩嶽三輪社（穂高有明）では、太平洋戦争後間もなくオフネを造らなくなりました。現在の祭りでは、オフネの櫓部分に紅白の幕を巻いて境内に奉納しています。神事には氏子総代が提灯、御幣を掲げてこの櫓の周りを3周しており、かつてのオフネ祭りのオフリョウの名残が見られます。

矢ノ沢山の神社（明科光）では、昭和60年ごろにオフネが祭りから姿を消しました。

矢ノ沢山の神社のオフネは里山辺型でしたが、車輪はなく、担ぐかたちのものでした。矢ノ沢は光地籍なので、昭和30年に明科町が発足するまで、光五社（明科光）の祭りへオフネを出していました。解体したオフネを担ぎ下ろし、五社近くで組み立てたそうです。昭和30年以後は、矢ノ沢山の神社でお祭りをするようになりました。矢ノ沢は長峰山頂に近い山間部に位置する集落です。急な斜面を担ぎ上げるためには少なくとも16～20人の担ぎ手が必要で、綱をつけて担ぎ手以外の人や子どもたちにも引いてもらったといいます。

小岩嶽は太平洋戦争後の人手不足と用材不足からオフネを造ることができなくなりました。矢ノ沢も時代の違いはあれ、担ぎ手が少なくなったことでオフネを出すことができなくなりました。

かつて、安曇野のオフネ祭りは、「お祭り青年」と呼ばれる10代後半から20代の地域の若者（男性）に支えられていました。この若衆組は「旭連」（潮、中堀）、「豊葦連」（岩原）など「□

⑻　三田村佳子『風流としてのオフネ』153頁　表3　205～207頁　表5　表6　表7

《矢ノ沢山の神社の担ぎ舞台（昭和 53 年・個人蔵）》

□連」と呼ばれました。しかし、過疎化や少子化、地元で就職し、祭りに関われる人が減少するなど、様々な社会の変化によって若者たちによる祭りの継続が困難になりました。

現在、多くのオフネ祭りは年齢に縛られることのない保存会を中心に行われています。年齢や性別を縛らないことで、多くの人が祭りに参加できるようになりましたが、それでも尚、オフネを造り曳き続けることの難しさは、今も多くの団体が抱える問題と言えます。

⑷　変化・復活するオフネ祭り

田澤神明宮（豊科田沢）の春の例大祭には、宮本、野田、南原の３地区から１艘ずつオフネが出ます。以前はここに中村、大口沢、徳治郎地区からのオフネも曳かれてきていました。しかし、中村、大口沢では、人手不足から平成に入ってからオフネを曳くことができなくなりました。徳治郎では平成 15 年、地元の伊勢宮を氏神として社殿を造営したことを契機に、田澤神明宮へはオフネを出さなくなりました。現在は、10 月に開催する伊勢宮神社例大祭にオフネを曳いています。これには、田澤神明宮への道のりが国道であったため交通量が多く、曳行が困難になったという事情もあるようです。

上生野正八幡宮（明科東川手）では、平成８年にオフネを造らなくなりましたが、22 年にオフネを復活させ、24 年の上生野正八幡宮祭典でも見事な柴舟（ローソクブネ）が曳かれました。

また、真々部諏訪神社（豊科高家）の秋の例大祭では、昭和 40 年に人手不足などの理由から造らなくなったオフネを平成 11 年に再び造りました。木偶などのフネ飾りは歴史などを題材にした板絵に変え、現在まで継続してオフネを造り続けています。

一度途絶えてしまった祭りや行事を、復活させるということが、どれほど難しいか、消えていったオフネの数を考えると想像に難くありません。

また、伝統をつなぐため子どもたちの参加を促したいと工夫をしている地域もあります。

岩原山神社のオフネ祭りでは、平成 10 年、新たに子どもが担ぐための子供舟を造り、小学生や幼児もオフネ祭りに関われるようにしました。

二　新しいオフネ祭りの息吹

穂高有明豊里は、太平洋戦争終戦時まで、旧日本軍の松本歩兵第五〇連隊の演習地として使用されました。終戦後、開拓団が入植し、現在のような広大な農地と穂高温泉郷を含むリゾート地に開拓されました。豊里という名は、入植し苦労を重ねて開拓した人々の願いが、そのまま表れていると言えます。

豊里穂高神社は、水源地に祀られていた水神と昭和 20 年代中ごろに穂高神社を勧請して合祀し、氏神として祀ったものです。現在の豊里公民館北側に遷されたのは昭和 53 年、平成元年には穂高神社御遷宮の際に社殿を譲り受け、立派な社殿となりました。9 月半ばには祭典のほか、地域住民が楽しめる催しが行われていましたが、オフネを造って曳くということはありませんでした。

この豊里でオフネ造りの機運が高まったのは平成 21 年のことです。秋の祭典では、酒樽やリヤカー、コタツヤグラを利用し、角燈籠などで飾って神輿を造り、子どもたちが地域内を練り歩くということを行っていました。しかし、豊里に移住

した人の中には子どものころにオフネを曳いた経験を持つ人もあり、子どもたちに夢を持ってもらいたい、豊里にオフネの文化を育てたいという願いから、オフネ造りを計画しました。

オフネ造りには、穂高神社の御船祭りでオフネ

《豊里で曳かれていたリヤカーの神輿（個人蔵）》

造りを担っている睦友社（ぼくゆうしゃ）や、穂高人形・御船祭保存会の協力もさることながら、材木や金属の加工、人形を作る美術、祭り囃子の指導など、住民がさまざまな技術を持ち寄り、寄付を募（つの）ったといいます。多くの住民の力を結集し、豊里初めてのオフネを完成させました。オフネには地域の伝説や歴史を題材としたフネ飾りも造られました。

最初に造ったオフネは、一輪車用の車輪12輪を使用したものだったので、オフネの重量に耐えきれず、曳行（えいこう）中ボルトが脱落するなど、関係者を冷やりとさせるトラブルもあったといいます。しかし子どもたちがオフネに乗り、御囃子の演奏を披露する中を曳行されたオフネの姿は、豊里の人々にとって感慨（かんがい）深いものでした。

このオフネ祭りの成功は、関係者にとって自信となり、翌年は穂高神社御船祭りで使われた古いオフネの材を譲り受け、さらに大がかりなオフネ造りを行いました。オフネ造りは、地域の人々が集い語らう場となり、開拓時代からの住民や、新たに移り住んだ住民も一緒になって、ひとつのオフネを造り上げます。御囃子を演奏する子どもたちも、指導を受けて上達しました。豊里の御囃子は指導者の出身地である細萱洲波神社（ほそがやすわじんじゃ）（豊科南穂高）の御囃子4曲と豊里穂高神社を勧請した穂高神社の御囃子2曲だといいます。

平成24年の秋の例大祭も盛大に行われました。

宵宮（宵祭り）では、オフネは豊里穂高神社から北の集落を曳行されます。先導は豊里穂高神社御船保存会と1.5ｍほどの竹ひごに五色紙の飾りをつけたハナを持った子どもたちです。ハナは門々で待つ氏子へ配られ、もらった氏子は子どもが持つ竹筒に小銭を入れます。これは本祭りでも同様に配られました。

オフネは神社に戻ると境内でもある広場を3周した後、前後に大きく揺らされます。その後、神事が行われ、青年太鼓が披露されます。

本祭りでは、朝早くから子ども相撲が行われます。この日、オフネは集落の南を曳きまわされます。観光施設もあり、道行く観光客もオフネの曳行を見守ります。オフネが神社に戻ると祭りは終わりとなります。

豊里では、オフネ祭りの伝統を継承しつつ、新しい祭りを作り上げた人々の熱気が感じられました。

《豊里のオフネ》

三　「お祭り展Ⅰ」活動報告

1　お祭り展の概要

「お祭り展Ⅰ」では、展示内容や関連イベント等を具体的に検討するため、実際にオフネ祭りを担っている保存会等の団体、観光推進や地域振興に主体的に携(たずさ)わる団体、オフネ祭りあるいは文化財の研究者等、それぞれを代表する方々で実行委員会を立ち上げました。この実行委員会での検討を経て、「お祭り展Ⅰ」が実施されました。

検討の結果、調査したオフネ祭りの現状を中心に展示をすることとしました。その上で、代表的とも言える県及び市で無形民俗文化財として指定している５つのオフネ祭りに焦点をあてた展示とすることまでは早々に決まりました。

しかし、祭りという形の無いものを展示するという点で、展示資料や内容について検討を重ねました。実行委員会の指導者[(9)]としてお願いしていた先生方からのアドバイスもあり、従来の展示方法として考えていた「見せる」だけの展示から祭りを「体験（体感）する」、或いは祭りに「参加してもらう」展示を目指すこととしました。

また、安曇野には43艘ものオフネがあるということ、その全てに祭りを作り上げている方々の思いが込められていることから、やはりオフネ祭りを写真で紹介するだけではなく、なんらかのかたちで展覧会に参加してほしいと考えました。そこで、全てのオフネ祭りを行っている団体に声掛けし、①祭りに関するアンケートを行う　②宵祭りで使用する燈籠を借用する　③祭りの際に着用する法被を借用するということを行い、殆どの団体に快く応えていただきました。

次に会場について、当館は旧豊科町の中心に位置し、大型スーパーマーケットにも隣接しています。人通りも多く、車を利用して来館するには便利ですが、前にも述べたとおり市民の認知度はあまり高くありません。

そこで、この展覧会では大勢の市民に博物館を知ってほしいと考え、会場を当館のほか、市立図書館や展示に利用できるホールなどが併設された「穂高交流学習センターみらい　展示ギャラリー」（以下「みらい」）、「豊科交流学習センターきぼう　多目的交流ホール」（以下､「きぼう」）の３ヶ所としました。「みらい」や「きぼう」は、展覧会を無料で観覧していただけるほか、図書館に訪れた市民が思いがけなく展示を見ることができます。そのため、普段あまり博物館を利用しないという市民が、博物館を訪れるきっかけとなるのではないかと考えました。

2　「みらい」での展示内容

具体的な展示としては、先ず、オフネの実物展示を計画しましたが､どの会場も搬入口の大きさ、会場の広さ（天井高）などの問題があり、会場内にオフネを展示できないということが判明しました。そこで､「みらい」と当館の屋外にオフネを展示することとしました。

穂高神社に近い「みらい」では、展覧会直前の穂高神社御船祭りで曳きまわされた穂高区の子供船を、参加者を募って会場まで曳いてくるというイベントを含めた展示としました。

「みらい」のエントランスホールは東側が全面ガラス張りになっています。その外側へ、オフネが入る大きさのテントを張り、親子など約100名と御船の保存団体睦友社の皆さんの協力で、穂高神社からおよそ１キロの道のりを曳いてきたオフネを展示しました。

---

(9)「安曇野のお祭り展実行委員会指導者」 國學院大學名誉教授　倉石忠彦氏　信州大学教授　笹本正治氏　跡見学園女子大学教授　倉石あつ子氏

《参加者と曳き、展示をした穂高区子供船（睦友社による飾り物）》

この展示は残念ながら、展覧会期前の９月30日から10月６日までの限定展示となりましたが、オフネを曳いた参加者の熱気だけでなく、沿道へ出て見ている人の様子からも、「参加型」展覧会の幕開けとしては十分な手応えを感じました。

会期中の「みらい」の展示は、穂高神社御船祭りのオフネの山といわれる部分、歴史の一場面を等身大の木偶（穂高人形）、背景、松や杉などの柴、などで再現したフネ飾りを中心にすることとしました。

フネ飾りを制作している保存団体は穂高人形・御船祭保存会です。保存会には睦友社、七星会（しちせいかい）、一真会（いっしんかい）という団体があり、それぞれ独自の木偶づくりの技術を持っています。御船祭りでは、当日までお互いの飾り物の内容を明かさないなど、団体同士が競い合いながら切磋琢磨（せっさたくま）しているといいます。

前述の穂高神社から曳いてきたオフネのフネ飾り物が睦友社によるものだったので、一真会には、「みらい」展示会場でのフネ飾りの再現展示をお願いし、七星会には普段見ることのできない、木偶の作り方や、フネ飾りの制作過程についての展示と、小学生を対象としたワークショップにご協力いただきました。

一真会では、この展覧会のために新たな飾り物を作っていただきました。祭りの時と同様に当日出来上がるまで、飾り物の内容は事務局にも伏せられるという徹底（てってい）ぶりでした。出来上がったものは、「大坂夏の陣　真田幸村の奮闘」で、騎馬武者二人と槍を持った武者一人と、大阪城の御濠が描かれた背景に松や柳が飾られたものでした。会期中、この飾り物の前で足を止める図書館利用者や、記念写真を撮る親子の姿をよく見かけました。

多くの方から「興味深かった」という感想をいただいたのが七星会による「穂高人形の作り方」という展示でした。穂高人形の普及と継承を目的に作られた手引書[10]を参考とし、不明な点については七星会の代表、人形師の牛流弘次（ごりゅうこうじ）氏にお話を伺いながら補足し、昭和初期から補修しながら使い続けている貴重な老若男女の木偶の頭（かしら）や人形の持つ小道具、衣装などを展示しました。段ボールを利用した鎧（よろい）、人形師が参考にしている歴史資料など、ただオフネを見ているだけではわからない細部にまでさまざまな工夫が凝（こ）らされていることがわかり、祭りで見るオフネとは違う一面を知ることができる展示となりました。

《一真会によるフネ飾り》

⑽　穂高人形・御船祭保存会（2003）『穂高人形の作り方　穂高人形飾り物・御船祭り手引書』

《七星会による展示を見る親子》

《「きぼう」での展示全景》

七星会の協力のもとに行われた、木偶の鎧を実際に着てみるというワークショップでは、親子連れ13組が参加しました。男の子はもちろん、女の子は巴御前（ともえごぜん）をイメージした武者姿となり、一真会のオフネ飾りの前でポーズを取りながら記念撮影をして楽しんでいただきました。

3　「きぼう」での展示内容

もうひとつの会場「きぼう」は、多目的交流ホールが広く、比較的多くの資料が展示できることから、市内すべてのオフネ祭りが概観（がいかん）できる展示を目指しました。地図にオフネ祭りがおこなわれる神社を示すとともに、すべてのオフネの写真と、祭り団体の法被を展示しました。また、その広さを活用して、中萱熊野神社のオフネ祭りのフネ飾りを展示しました。中萱熊野神社では、宵祭りでは子どもが曳く屋台、本祭りではオフネが曳かれます。どちらにも木偶を使ったフネ飾りが作られ、その制作は紫石会（しせきかい）が担っています。中萱熊野神社のオフネは９ｍもの高さがあり、そのフネ飾りの木偶も等身大より大きく迫力のあるものです。平成24年のフネ飾りはＮＨＫ大河ドラマ「平清盛」にちなみ、「平治の乱」でした。ホールの舞台いっぱいに展示されたフネ飾りは圧巻（あっかん）で、見る人を驚かせました。

4　博物館での展示内容

展覧会の本会場でもある博物館では、「若者のデートスポット」になるようにという思いを込め、各祭り団体から借用した燈籠で「宵祭り」の雰囲気を出しました。入り口となる北展示室では、宵祭りと同じように、展示順路を参道に見立てて燈籠を配置し、照明をおとし、入り口からすぐ見えるところには、潮神明宮の宵祭りで曳かれる蝋燭を灯したオフネの大きなタペストリーを展示しました。タペストリーにも蝋燭型の電球をつけ、蝋燭船の雰囲気が出るようにしました。また、オフネ祭りでは珍しく大人が御囃子を演奏する、力強い潮神明宮の祭り囃子を会場内に流れるようにし、さらに展示室を「祭り」空間へと変えるようにしました。

会場内には実物のオフネを展示できないものの、やはりオフネの大きさを実感してほしいと考え、重柳八幡宮と住吉神社オフネ祭りの楡（にれ）地区のオフネ[11]をその幕で再現することとしました。重柳八幡宮のオフネは実際の全長が15ｍで、さすがに会場に収まらず、９ｍほどになりましたが、幕だけでもオフネの巨大さを体感していただけたと思います。

楡地区のオフネは中央部にのれんが下がっており、中に入れるようになっています。それに気付

⑾　住吉神社のオフネ祭りでは、住吉地区と楡地区から１艘ずつオフネが出される。

《宵祭りの燈籠と潮神明宮の蝋燭船タペストリー》

いたのは会期が始まってからでした。会期途中ではあったものの、急きょ幕の中に入れるよう誘導するキャプションを作り、オフネの中で演奏する囃子方の気分を味わっていただけるようにしたところ、多くの来館者がこの体験を「良かった」と感想に残してくださいました。

《楡のオフネ幕の展示》

南展示室では、宵祭りから一転し、穂高神社御船祭りに係（かかわ）る古文書や、住吉神社に伝わる江戸時代の木偶の頭（かしら）、重柳八幡宮祭保存会で飾り物作りの教本としている資料など、オフネ祭りの歴史の一端が窺える資料を展示しました。オフネ祭りの起源などさらに踏み込んだものになればよかったのですが、現在わかっている範囲での限られた展示となり、「御船祭りの歴史についてもっと知りたい」という方にはやや不満が残るものだったかと思います。

次にオフネ祭りの現状と未来というテーマで、さまざまな理由で造られなくなったオフネがあることと、新しい祭りとして豊里穂高神社のオフネ祭りを紹介しました。

豊里でかつて曳かれていたリヤカーの神輿はすでになくなっていましたが、豊里穂高神社御船保存会の方たちのご好意により、この神輿を再現をしていただくことができました。ここでは、リヤカーの神輿から現在のオフネ（平成24年のフネ飾り「泉の小太郎」）へと変わった豊里の歴史を紹介することができました。伝統的な木偶作りとは違う豊里独自のフネ飾りからは、まさに新しいオフネ祭りの息吹を感じていただけたのではないかと思います。

最後に、特徴的なオフネ祭りを映像で紹介するコーナーを設けました。ひとつの祭りにつき3分ほどの映像でしたが、全てを上映すると20分を超える長さになります。写真や資料だけでは伝わらないオフネ祭りに見入る来館者も多く見受けられました。

一方、会場の外では、会期後半(11月4日～12月2日）ではあったものの、館駐車場にテントを張り、市内唯一の担ぎ船である岩原山神社のオフネを展示しました。博物館駐車場は人通りや車通りの多い道に面しており、道行く人たちが立ち止まって見たり、近づいて触ったりする様子が見られました。

このオフネは、展覧会の最終日、ファイナルイベントとして、一般参加者と山神社祭典保存会の皆さんが、岩原山神社本来のオフネ祭りと同様に担ぎ壊すという催しで、見事に博物館西の駐車場で壊されました。

5　その他のイベント

その他の展覧会関連イベントとして、オープニングイベント、ナイトミュージアム、お囃子演奏会及び講演会を開催しました。

「みらい」を会場とした講演会では、三田村佳子先生をお招きし「オフネ祭りの展開－諏訪大社と穂高神社－」という演題で、オフネの形態からその伝播の歴史について、また安曇野のオフネの独自性についてもお話いただきました。(12)

また、各地の祭り囃子の演奏会も行うことができました。オープニングでは豊里子供囃子連、ナイトミュージアムでは新田神社の新田御囃子愛好会、お囃子演奏会では、潮神明宮祭典保存会と重柳八幡宮祭り保存会、下堀諏訪神社のお囃子の保存会の方々に祭り囃子を演奏していただき、参加した大勢の方に安曇野の様々な祭り囃子を聞いていただくことができました。

また、調査に協力いただいた西牧尚人氏による「きぼう」での展示説明会なども行いました。

ほかに、補助金事業とは別に、例年行っている安曇野の伝統食を作るという博物館講座を「祭りのおごっつぉ」として開催しました。

四　まとめにかえて

これまでの当館の展覧会のような固定的で静的な展示から、スタイルにこだわらない動的な展示という試みを具体化させるよう心がけた取り組みを通しての成果に触れます。

まず、展示そのものを観覧いただいた入場者数は、3会場でおよそ9000人と博物館の年間入館者数を超えており、3会場同時開催の効果や影響を強く感じさせる結果となりました。参加体験型のイベント（計7回）は、事前の予想を上回る500余名の参加を得ました。特にプレ・ファイナル両イベントは、公道を使いオフネを曳き回し、担いで歩く新しい試みでしたが、両方ともに約100名の参加で大きく盛り上がるものになりました。関わった祭りの保存団体や地元の方々にも意欲的に応援していただき、この企画が地域の活性化にもつながっていると実感しました。

以下、来館者に記述いただく感想ノートに寄せられた中から一部を紹介します。

・企画も展示も今までに無い工夫が感じられすばらしい。
・実際に曳くなどに関わった人は少ないと思うので、体験イベントは価値があった。
・安曇野のオフネの数の多さや多様な形に驚き、地区での祭りを続けたいと思った。
・祭りの歴史的要素や時代的変化についてもっと深めた展覧会にすると良い。
・ややごちゃごちゃした展示になっていないか。
・説明の文字が細かすぎるなど改善が必要。

次に祭り囃子を演奏していただいたり、資料等を提供いただくなど展示に参画していただいた祭り保存会等の動向にも触れます。

調査・企画等の段階では、祭りそのものを見せたり演じたりする依頼にやや戸惑ったり、負担に感じた団体も見受けられました。しかし、実際の場になると少しでも良い形のものを示そうと熱が入り、積極的に取り組む姿に変わっていました。

展覧会終了後の感想などからは「自分たちの祭りを世に知らしめられて良かった。」「予想より高い評価の反応に改めて力が出た。」など、確かな手ごたえを感じられたようです。

自分たちの祭りの価値を改めて見直しながら伝統を継承し保存していこうとする機運が盛り上がっている地域や、来年の祭りに向けての団結を強め準備しようとする団体など、伝統文化の保存や継続及びそれを通しての地域振興に、若干なりともお手伝いできたものと考えています。

実際に、オープニングで演奏していただいた豊里子供囃子連は、このイベントが契機となり、地元の観光施設などに招かれるなど、演奏活動の幅を広げているとの報告があり、展覧会を開催した

(12)　三田村先生の講演については、形をあらためてご報告させていただくことを検討しています。

意義を実感できる出来事のひとつとなりました。

最後に、半年にわたるオフネ祭りの調査と、ほぼ並行して展覧会の立案と実行という、無謀とも言える計画ではありましたが、多くの市民のみなさんの協力を得て、無事に展覧会とすべてのイベントを行うことができました。この場をお借りして、展覧会にご協力いただいた祭り保存会や祭に関わる団体、関係の方々に深くお礼を申し上げます。

参考文献

三田村佳子『風流としてのオフネ　信濃の里を揺られゆく神々』 2009　信濃毎日新聞社

青木治『穂高神社とその伝統文化』 1988　穂高神社社務所

安曇野市教育委員会『安曇野市の無形民俗文化財　安曇野市文化財調査報告書』 2011　安曇野市教育委員会

穂高人形・御船祭保存会『穂高人形の作り方　穂高人形飾り物・御船祭り手引書』 2003

豊里歴史編纂委員会『とよさと　豊里50年のあゆみ』穂高町豊里区　1995

豊里区・豊里分館新聞編集班 『とよさとだより　特別号』 2009

真々部区誌編纂委員会『真々部区誌』 2010

明科町史編纂会編『明科町史　上』 1984　明科町史刊行会

明科町史編纂会編『明科町史　下』 1985　明科町史刊行会

豊科町誌編纂委員会編『豊科町誌　別篇　民俗編』 1999　豊科町誌刊行会

明科廃寺研究の今日的意義と今後の課題
～博物館講座「安曇野歴史散歩」の実践を通して～

百瀬新治

はじめに

安曇野市豊科郷土博物館では、当館主催の各種講座を年間15回程度で企画実施してきています。内容により外部講師を招聘（しょうへい）する場合と、館職員が担当して講座全体を進める場合がありますが「安曇野歴史散歩」講座は、これまで館職員による２～３回連続開催の講座として行なわれてきた経緯があります。24年度に着任した百瀬は、この講座を分担し取り組むにあたり、文字通り身近な歴史に触れて楽しく学べる方向で、市民参加の研修に適切なテーマや対象の調査検討を進めました。時期を同じくして明科歴史民俗資料館が閉館となり、博物館では明科廃寺を含む収蔵資料（出土遺物）中心の展覧会を実施しました。この中で、古代寺院の存在が判明して約60年、寺の性格や創建年代等で新たな知見が加わり注目を増しつつある明科廃寺に焦点を当てた講座の企画を思いつきました。これまで市民一般には広く知られてこなかった廃寺の検討を通して、古代の安曇解明に向けた機会になればと考えてみました。

講座を開催した結果は、全３回における参加者が約300名と主催者の予想を上回り、意欲的で熱気あふれる研修会となりました。講座に参加できなかった方々から、受講内容の記録が欲しいという声をいただいたこともあり、講座の成果と課題をまとめようと考えました。博物館の学術的職務として、研究紀要の中で博物館で進めた学究を文章化し、今後いろいろな形で進められる調査研究に役立てようと考えてのことです。

本稿の全体構成としては、まず第１回講座を中心に、資料を作成する中でまとめた研究史と現在の研究到達点及び課題を扱いました。次に、廃寺の調査研究に関係する方々を招いて実施した第２回講座のシンポジウムにつき、論議の経緯や明確になったことを概括してあります。続いては、第３回講座で実施しました岐阜県への現地踏査・見学の記録から、講座を進める中で明らかになった課題や今後の展望等をまとめました。

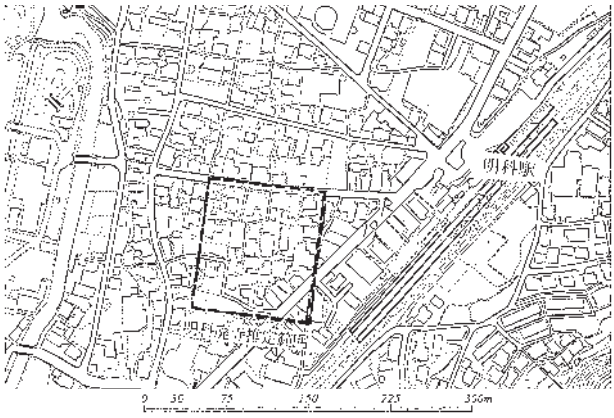


図１　明科廃寺位置及び推定範囲図

一　明科廃寺研究60年間の歴史と現状

１　突然判明した白鳳期創建の古代寺院

昭和28年（1953）１月、安曇野市明科（当時は東筑摩郡中川手村）のJR篠ノ井線明科駅から南西方向約200mを隔てた国道19号線沿いの地点で、住宅新築基礎工事に際し布目瓦が発見されました。瓦を採取した旧中川手中学校教諭から連絡を受けた原嘉藤（はらかとう）氏により、住宅建設工事に合わせて２度の発掘調査が実施されたのです。細長い調査溝（トレンチ）と検土杖により土中の状態を調べる限定的な調査方法でしたが、礫敷遺構（れきじきいこう）の確認

と瓦等古代寺院関係の遺物検出という成果が得られました。

確認された礫敷遺構は、ほぼ同じ大きさの礫が水平に敷かれたような状態で見つかり、礫の下は黄褐色土で固められていたと記録されています。また、礫の上面や礫の間に瓦等の遺物が散在していたが、礫敷より下に遺物は出土していないとの所見です。礫敷は東西 15m 南北 10m の範囲で確認できましたが、さらに外に拡がる状況もあって、その規模や形状は明確になりませんでした。

出土した遺物としては、布目瓦を中心に質量ともに豊富な瓦類があげられます。このうち軒先を飾る軒丸瓦（のきまるがわら）については、施された紋様で 3 形式に分類しての分析が進められてきています。寺創建時のものとされる素弁八葉蓮華紋（そべんはちようれんげもん）の軒丸瓦は、同じ文様の瓦が出土した他の廃寺例を含めた研究で、白鳳（はくほう）時代から奈良時代と古い時期の創建ではないかとされてきました。また、古代寺院の瓦屋根両端に据える鴟尾（しび）と木造塔を縮尺して模したとされる瓦塔（がとう）等の出土から、寺の構造や性格につながる資料として重要視されてきました。

布目瓦を中心とする出土遺物の検討研究から、古代の寺院址の可能性が追究されて史跡名として明科廃寺とされてきました。しかし、礫敷遺構以外に遺構の内容が明確にならず、伽藍（がらん）の配置された本格寺院から瓦塔を安置した簡素な草堂（そうどう）まで、建物等については諸説が提唱されたまま長期間が経過することとなりました。当時の記録では近接する弁天池近くに建物を支える礎石の可能性もある石の存在を認めながら、石を調査し遺物として扱うことを含め、遺跡（廃寺）への追加調査が進まなかったことがその主因だと考えます。明科という場所の地理的状況や古代寺院研究の考古学的なアプローチ不足が、廃寺を含めた実態解明の遅れに大きく影響しました。

その後、明科町史はじめ廃寺に関係するいくつかの文献や論文が出されています。寺は白鳳期に創建され七堂伽藍（しちどうがらん）を備えていたとの論究や、明科の地が古くは安曇に帰属していたとする指摘[1]も出されましたが、明科廃寺全体を明確にする学究は大きく進展しないままに 20 世紀を終えようとしていたのです。

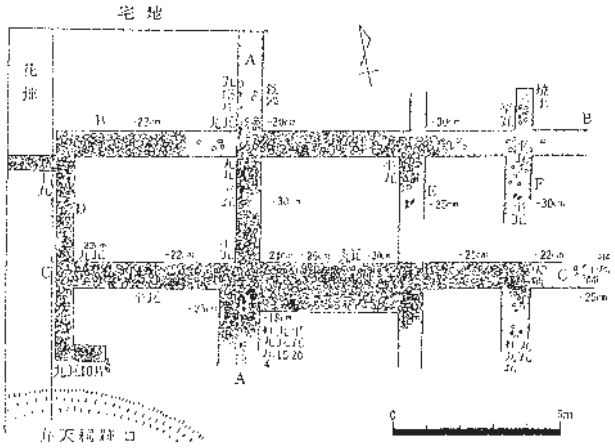


図２　明科廃寺礫敷遺構実測図

2　ようやく明らかになった廃寺の実像

明科廃寺発見の発端となったのは民間住宅の建築工事だったことは前に触れましたが、平成 11 年（1999）になり再び同じお宅の建替え工事が実施され、明科町教育委員会は国庫補助を受けて発掘調査を実施しました。個人の宅地で狭く限られた範囲ではありましたが、前回調査以来 50 年近い時を経てようやく本格的調査が実現しました。

この調査における一番大きな成果は、建物址（たてものし）を中心とする遺構が明らかになったことでした。方形または円形に掘り込んだ柱の穴が一定の間隔で整然と並んで見つかり、いくつかの建物がこの場所に存在したことが判明しました。柱穴には柱の痕跡が残されているものも多く、掘立柱建物址（ほったてばしらたてものし）

(1)　明科の帰属郡については、倉科明正氏の『明科町史』中の安曇郡前科郷比定や桐原健氏の同郡高家郷との関連指摘など、筑摩郡帰属への問題提起が続いています。平成になり、旧南安曇郡の古代集落の調査進展を受けて、山田真一氏・百瀬新治他が明科の帰属郡を再検討してきました。

と呼ばれ地上に直接柱を立てる建物が４棟発掘されました。建物は重なって発掘されており、時間差をもって建て替えられた可能性が高いことがわかりました。ただし、調査区域の外に延びていく建物も多く規模や形状の確定が難しいのですが、梁行・桁間それぞれ３間以上の大きな建物や幅１～２間長さ５間以上の細長い建物等が推定できました。なかには、庇（ひさし）が付き雨水を排水する溝を持つものも存在するのです。

さらに建物に関係して注目された調査結果がいくつかあります。まず、四角く掘り込んだ大きな柱穴（１辺１ｍ以上）や雨水対策の直線に設けられた溝を伴う、いわゆる一般的な住居とは異なる建物が認められる点があります。さらに、建物のほとんどが瓦葺（かわらぶ）きであったことが、瓦の出土する状態等からわかっています。また、前の調査で見つかった礫敷遺構と今回の建物址の間に、幅 2.5m ほどの何も建てられない落ち窪んだ区域が直線状に続き途中で直角に曲がることなどから、礫敷遺構と建物址を区切る道路址の可能性の高い遺構も明らかになりました。

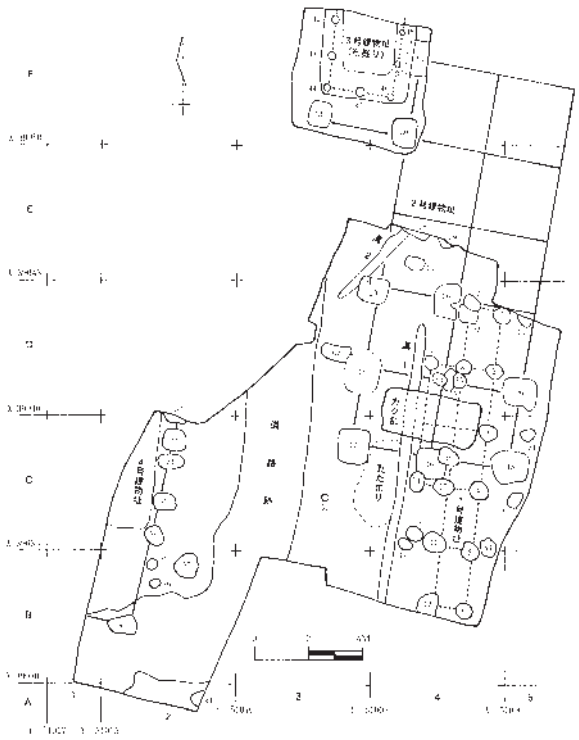


図３　明科廃寺建築址等実測図

出土遺物でもいくつか新たな発見がありました。まず仏塔を小さく真似て焼き物にした瓦塔については、昭和 28 年調査で出土した破片と今回発掘された破片が接合できたことです。前回と今回の調査が直接つながり、どんな形態の瓦塔かも具体的に判明し始めました。接合できた屋根部分で測ると一辺 40cm とかなり大きく制作され、八角形の屋根という瓦塔では例を見ない形であることがほぼ特定できました。瓦類では、軒丸瓦をはじめ前回調査を拡充する資料が得られ、とりわけ白鳳期創建を裏付ける内容の遺物が揃いました。加えて日常で使用する須恵器（すえき）の食器類も多く出土し、創建（そうけん）時期に一致する７世紀後半のものから８及び９世紀まで幅広い時期の物だと判明しています。

この発掘調査より前に旧明科町内では廃寺と密接に関わる重要な発掘調査を２件実施しています。平成９年（1997）の桜坂古窯址（こようし）の発掘調査では、窯址（かまあと）から明科廃寺出土と同一の瓦が複数認められ、寺に供給する屋根瓦を焼いた窯の存在がはじめて明らかになりました。俄然（がぜん）注目されたのは、古来筑摩と安曇の郡境と考えられてきた犀川を挟む窯址の位置です。その間は直線で約 1500 ｍの距離ですが、広い川幅を越え他郡の窯からの瓦の移動となり、明科の帰属郡や古代郷の位置に関する新たな問題提起となりました。

もう一つ、廃寺の北に隣接して位置する潮神（うしおしん）明宮前（めいぐうまえ）古墳群（こふんぐん）では、発掘調査により水田の下に存在するいくつかの新しい古墳が明らかになりました。まず、古墳が築かれた時期は出土した遺物から絞られ、７世紀後半とわかりました。穂高など安曇野の古墳には数少ない周りに溝が巡るタイプで、全体を調査できていませんがどうやら四角く築かれていて、溝からは複数の馬の骨が出土しています。古墳が築かれた時期と廃寺創建時期が重なることに加え、周溝のある方墳という築造や馬骨の出土は、寺を創建した人物や集団にも関係する貴重な成果となります。正式な発掘調査報告書

の刊行が待たれます。

3　調査・研究の進展から見えてきたこと

他方、飛騨山脈を挟んで安曇野市とは反対側に位置する岐阜県飛騨市においても、先述した平成11年（1999）の明科廃寺調査に前後して重要な発掘調査がされました。岐阜県飛騨市特に旧古川町付近は、盆地状の狭い範囲に古代寺院を数多く密集させて建立した歴史的経緯があります。このうち、寿楽寺廃寺及び杉崎廃寺での発掘調査が、明科廃寺を含む古代寺院全体の研究進展に大きな影響を与えたのです。

平成10年（1998）から12年（2000）に調査された寿楽寺廃寺では、明科廃寺でも出土した特殊な文様の軒先瓦が前から拾われていましたが、今回の発掘で寺に直接関係する遺物として実際に出土しました。明科はじめ滋賀県や山梨県からも出土し、相互の関連や意味が研究されてきましたが、寿楽寺廃寺から出土した複数の瓦は明科廃寺の瓦と成型（笵）まで同じ可能性が強まりました。また、出土した食器（須恵器）のいくつかに「高家寺」と寺名が書かれていました。飛騨国荒城郡「高家郷」がこの地と考えられており、安曇郡の古代郷名でありながら位置や範囲が明確にならない「高家郷」と関係する新たな発見でした。

平成9年（1997）から発掘調査された杉崎廃寺では、非常に保存状態の良い金堂や塔の礎石等を手がかりに、その伽藍配置が鮮明に確認できました。しかも伽藍が建つ中心部分は、一面にわたり礫が敷かれていたことが明らかになりました。調査当初からその構造や性格等が不明であった明科廃寺の礫敷遺構は、この調査結果で解明に向け大きな手がかりを得ることになりました。最初の調査で明らかになった水平に礫が敷き詰められていた範囲は、伽藍の中心部ではないかとの想定に有力な根拠が新たに加わりました。

廃寺創建時期と重なる7世紀後半における明科の状況もさらに判明してきました。

明科地域では6世紀代から8世紀初頭までに20基以上の古墳が構築されたことが明らかになりました。穂高古墳群に次ぐ群集する古墳の存在は、この時期の明科についての重要性・優位性を裏付けています。とりわけ、潮神明宮前古墳群に代表される7世紀後半期の存在とその内容は、寺院と古墳の関係を含め古墳時代末期から奈良時代の歴史を解明する極めて重要な成果になります。

さらに加えて、古墳時代における廃寺周辺集落の実態解明も、調査の進展につれ次第に具体化してきました。犀川に沿って明科を下流から上流に向けて概観すると、古墳時代前期の集落が営まれた上生野遺跡、廃寺に接し先行して集落が営まれた栄町遺跡、祭祀的性格の強い集落である龍門淵遺跡、最上流に位置する北村遺跡などが明らかになりつつあります。廃寺に関係する古墳時代後期の集落では、先行する時期を含め数カ所があります。このうち北村遺跡は、倉庫と想定できる掘立柱建物が並ぶ規模の大きな集落であり、周りを溝で囲む等、一般住居とは異なる家の存在も判明しているのです。古墳時代後期において、当時のムラといえる集落が廃寺周囲に何カ所か存在し、北村には大規模集落あるいは有力者の存在も指摘できる点が、廃寺建立及び存立の背景とからむ大きな意味を持つ調査結果になります。

発掘調査による成果が徐々に進むなかで、岐阜県側からの情報等を含め、明科廃寺を再評価し視点を変えて追究しようとする動きが出ています。

4　直近の研究動向

明科廃寺をテーマにしての講座を企画し準備を進める中でも、廃寺解明に大きく影響する研究が相次いで発表され、調査結果の分析検討で新たな進展をみています。

その1つは、明科廃寺の創建時期について、「（明科廃寺出土の軒丸瓦の）その形状から7世紀第Ⅲ

四半期（651年から675年）に位置付けられ、信濃最古の軒丸瓦と考えられる」と断じた倉澤正幸（くらさわまさゆき）氏の論文です。明科廃寺の時期は従来から論究されてきており、創建を古代でも白鳳期あるいは８世紀に入る奈良時代と論じた記述等いくつか存在しています。倉澤論文では、時期をさらに時期を限定させて白鳳期前半と特定し、信濃で創建された最古の寺院と位置づけています。ただし、瓦の文様と制作技法を中心に検討を加えており、時期を特定する具体的根拠については従来の研究成果に準拠しています。

第２として、明科廃寺出土と飛騨寿楽寺廃寺出土の軒瓦について、両者を直接比較することで結論を得たことにあります。山路直充（やまじなおみつ）氏は、古代寺院造営に関する情報伝達の研究を進める中で、平安時代後期の日本国図で飛騨山脈越えの道が示されている点に着目し、同笵（どうはん）瓦を含む両寺院造営等における情報伝播のあり方を究明しています。山路氏の提起を受けて、安曇野市教育委員会は明科廃寺の軒丸瓦を持参し、寿楽寺廃寺の瓦と直接比較して決着させることにしました。山路氏立会いのもと、笵傷（はんきず）の観察を中心に同笵に関する検討と、同笵が確定となった場合の制作時期の前後を明確にしようと試みました。結果として、両廃寺瓦が同笵であることが確定し明科の瓦が先行して制作されたことが、複数の笵傷観察から結論付けられました。明科廃寺建立時期等に直結する重要な研究の進展になりました。(2)

もう１点、明科廃寺で使用した瓦の供給窯の一つである桜坂窯址について、原明芳（はらあきよし）氏により出土資料が検討され、窯が営まれた時期が絞り込まれました。現在発掘調査報告書は未刊行ですが、廃寺創建のカギを握る供給窯址出土資料について、窯で焼成されえた須恵器に加え重なって造られた住居址出土須恵器で帰属時期の検討を進めました。特徴的な須恵器坏蓋（つきぶた）の状況から、窯址が営まれた最終は７世紀末の可能性が高くなったのです。時期の特定は難しいのですが、出土須恵器に大きな時期差は無いとの検討結果から、窯は短期間に営まれたと想定できます。これも、廃寺創建時期を決定していく上での大きな根拠要素となりました。

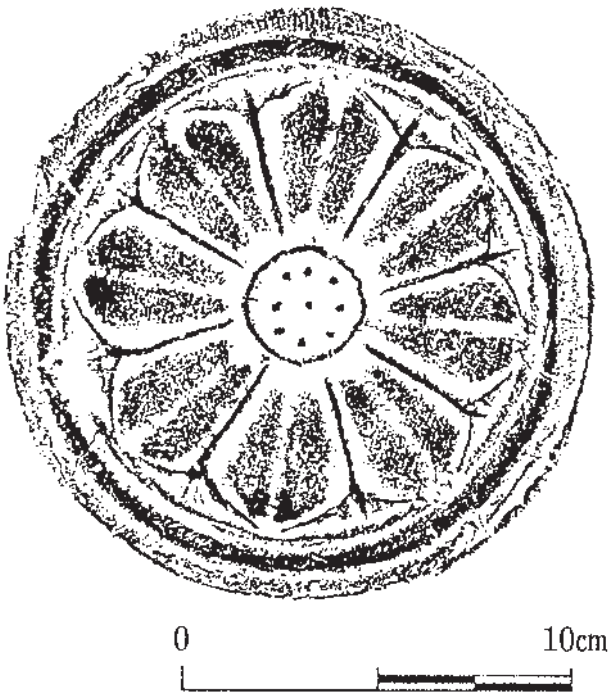


図４　明科廃寺出土軒丸瓦撮影図

二　廃寺に焦点を当てた初めてのシンポジウム

１　シンポジウムの目的及び討議計画

第１回講座では、明科廃寺の調査研究の経緯や現状について資料をもとに大まかに研修しました。それを受け、さらに廃寺究明に向けての講座として、関係研究者の方々をお招きしてのシンポジウムを企画しました。講座で明らかにしてきた成果と課題を観点に、討論の柱を次の３点に絞りまし

(2)　同笵瓦とその先後をめぐる新たな調査成果を受けての論考としまして、山路直充氏により『山国の寺－情報伝播からみた山国の交通－』2013八木書店があります。瓦を通しての古代の情報伝播や交通の様相、明科廃寺軒丸瓦の祖型や伝播上の位置づけ、安曇郡における高家郷の所在と郡寺としての明科廃寺等々、同笵瓦をめぐる新たな提起がされています。

た。

①信濃最古の寺院として位置づく7世紀第Ⅲ四半期の創建時期について、その妥当性を含め創建及び存続の時期を資料を根拠に多面的に探りたい。

②寿楽寺廃寺や桜坂古窯址等の最新研究成果を受け、明科廃寺と大和王権・信濃国・安曇郡や筑摩郡と寺創建の関係を検討したい。

③徐々に判明しつつある廃寺およびその周辺の実態を再確認しながら、今後の調査や研究及び遺跡保護の方向について意見交換したい。

この討議の柱により、特に今後の明科廃寺の研究調査を進めより深めるねらいのもと、5名の方にシンポジストを依頼し参加いただきました。

・桐原健氏（元長野県考古学会長）

地域の歴史研究者として明科廃寺に直接関係した論文をはじめ数多くの論及を進めている。

・倉澤正幸氏（上田市立博物館長）

国分寺瓦を中心に古代瓦の研究を重ねており最新論文で明科廃寺創建時期を明示した。

・原明芳氏（長野県立歴史館考古資料課長）

地域の古代集落から出土した食膳具の研究を進め、特に律令期前後についての論述も多い。

・大澤慶哲氏（元明科町文化財調査担当者）

長年明科の文化財に関わってきており、平成の廃寺発掘調査を担当し報告書を刊行した。

・土屋和章氏（安曇野市教育委員会文化財担当者）

現在市教育委員会文化財保護係を担当し廃寺周辺を含む埋蔵文化財調査を進めてきている。

シンポジウムの進行計画として、まず全体を二つに分け、前半ではこれまでの調査研究経緯とその問題点を提示いただき、後半に問題点からいくつかをを取り上げて討論する形としました。さらに、廃寺の今後については最後の参加者討論に含め会場全体に広めることとしました。今回の討議は資料等裏付けを大事にすることや、中途での一般参加者の声もていねいに扱うよう留意しました。さらに、シンポジウムで結論を得ることを目的視せず、これまで一部研究者に限られがちだった研究や保存活用策について、広く市民のみなさんに呼びかけ多くの方で考え合うきっかけと位置づけました。

2　シンポジウムにおける討論概要

山下（進行）

本日は信濃初の本格寺院・明科廃寺のなぞに迫るという講座統一テーマのもと、明科廃寺の価値と将来のことを考えあうシンポジウムを企画してきました。去る1月26日第1回講座で明科廃寺の調査研究の経緯と課題について豊科郷土博物館長百瀬より提起がありました。本日はさらに一歩学習を深めるということで、それぞれのお立場で研究されております皆様をパネリストとしてお迎え致しました。新しい研究の成果等々発表していただけると思います。私も楽しみにしています。早速シンポジウムに移ります。

百瀬（司会）

限られた時間ですが、明科の地で相当古く建立された寺が60年を経て日の目をみるという状況の中で、まず皆さんに明科廃寺の現状を知っていただきこれからどんな課題があるか考える機会になればと思っております。会場の皆さんのご協力をお願いいたします。

早速シンポジウムに入ります。第1回講座のおさらいになりますが、明科廃寺でどんな研究がされたかを扱います。市教育委員会埋蔵文化財担当の土屋さん、今までどのような調査をしてどのようなことが解ってきたかを簡潔にお話しください。

土屋

今回の明科廃寺に関係します安曇野市内の古代遺跡の位置関係はこのようになっています（プロジェクターにて遺跡分布図を掲示）。さら

に拡大し明科駅周辺の遺跡を細かく示します。古墳時代中期から後期の集落が明科総合支所付近にまとまっていることが確認できます。現在も、明科廃寺の北側で発掘調査をしています。

百瀬

古墳時代末期の７世紀後半から８世紀初頭、ここが問題の時期ですね。なにが問題かというと、この時代には信濃や松本平には瓦葺のお寺は無いという定説に、昭和28年の調査で瓦を葺いた本格的な寺の存在を提示したのに、大きな波紋に広がらなかった。ところが、前回講座で繰り返したように、明科廃寺から川を挟んで北にこの時期の古墳がある。犀川の対岸の桜坂古窯址ではこの時期に廃寺の瓦を焼いている。有名な北村遺跡でも同じ時期の規模の大きい集落が見えてきた。明科廃寺だけではなく、創建時の寺周辺もだんだん分かって、その実像や意味が明らかになりつつあるというのが今の状況だと思います。それでは７世紀後半の明科あるいは廃寺のことでどこまで言えるのか、古墳から古代を専門とする原さんお願いします。

原

桜坂の窯址出土資料を先月に全部見せてもらいました。ただし、資料の須恵器で年代を決めるということは、何年というように書いてあるわけではないので、他の遺跡で出土している似た特徴の須恵器土師器（はじき）等と比べて時期を決めなければなりません。桜坂の窯で焼かれ明科廃寺で使われた瓦があることは複数の資料で断定できます。さらに窯が営まれた時期を定めるとすると、窯出土資料に『返（かえ）りのある』特徴的な須恵器の食器蓋（ふた）がありました。明科廃寺でも同じく特徴的な須恵器杯Ｇがあります。

妥当性整合性のある年代を示している西弘海（にしひろみ）

	日本列島	安曇野地域
古墳時代	古墳造営の開始（箸墓古墳、椿井大塚山古墳）	○　祭祀遺跡（龍門淵遺跡）
	松本盆地でも古墳が作られる（弘法山古墳）	○　集落遺跡（明科上生野遺跡）
	武器・武具が副葬される（桜井古墳）	
	積石塚が築かれる（大室古墳群）	藤塚遺跡、北才の神遺跡
	横穴式石室が作られる	
	北部九州で装飾古墳が盛行	
	538年　仏教伝来	
	西日本で群集墳が作られる	
	前方後円墳が造られなくなる	
	588年　瓦葺建物創建	
	東日本で横穴式石室、群集墳が盛行	
	法隆寺創建	群集墳がつくられる（穂高古墳群、○潮古墳群）
	654年　大化の改新	○　明科地域で集落が営まれる（明科遺跡群栄町遺跡）
	672年　壬申の乱（信濃の兵）	○　潮古墳群８号墳（7C後半）
	684年　天武天皇　三野王を信濃に遣す	○　桜坂古窯跡（7C後半）　○北村遺跡（7C後半）
	686年　僧行心飛騨の伽藍に流される	明科廃寺創建
奈良・平安京時代	710年　平城京遷都	
	多賀城、太宰府の造営	
	764年　安曇部真羊調布を納める	筑摩山地で窯業生産（上ノ山窯跡群、菖蒲平窯跡群）
	794年　平安京遷都	扇央付近に集落が出現（三角原遺跡、堀金小学校付近遺跡、栗の木下遺跡）
	802年　征夷大将軍坂上田村麻呂が胆沢城を築く	○　明科遺跡群古殿屋敷の木棺墓に八稜鏡や緑釉陶器が副葬される
	1185年　平氏が滅亡	○　平安時代集落（明科上手屋敷遺跡）

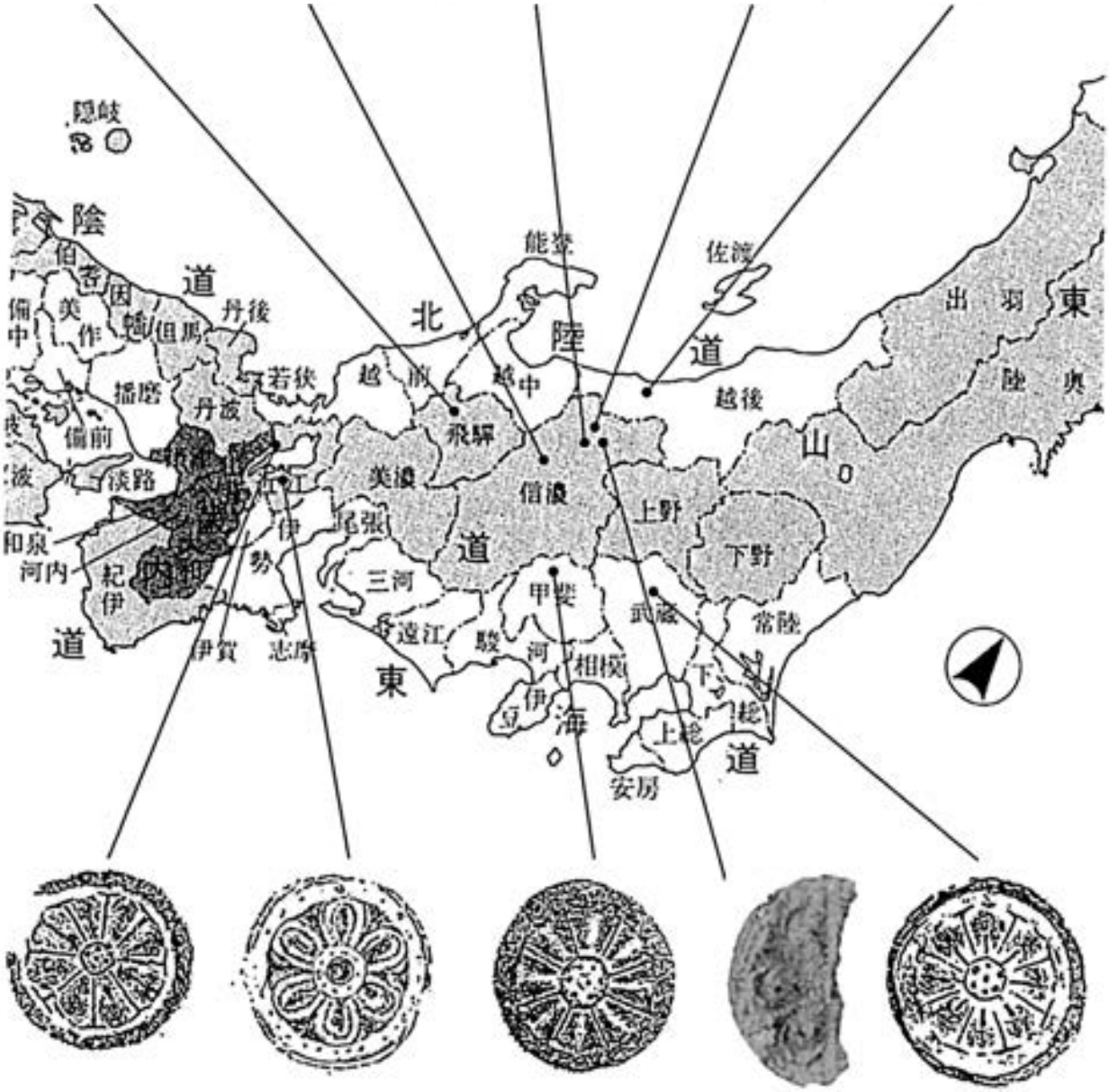
○印　明科地域遺跡

別表　明科廃寺関連年表

という先生の出した試案では、この須恵器がいつ頃に位置づけられるかというと、600年代後半から最後700年頃かなと思います。明科廃寺の瓦や桜坂古窯址出土の瓦や須恵器も上限はほぼ近い時期かと思いますが、どこまで遡れるかは正直よく分からず今研究しているのが現状です。

長野県全体から見ますと桜坂古窯というのは非常に特殊な窯だと思います。焼いていた小さい須恵器蓋の70%くらいが『返りのある』蓋

1　寿楽寺廃寺　　2　明科廃寺　　3　雨宮廃寺　　4　上石川廃寺　　5　栗原遺跡



6　衣川廃寺　　7　軽野塔ノ塚廃寺　　8　天狗沢窯跡　　9　善光寺境内　　10　勝呂廃寺

図５　明科廃寺と共通性のある軒瓦分布図

で、他にはあまり無い特殊な窯だと思います。関西の例と比べると、山田寺廃寺に同じ特徴の須恵器がみられ、時期は641年前後です。明科廃寺の須恵器はこの641年より新しいかなと思います。『返りのある』蓋は大阪難波宮でも少し出土し、800年前後まで続きます。漏刻跡が造られた660～670年あたりが上限かなと考えています。非常に微妙な事になりますが、皆さんの家にある食器を見てもらってもたぶん戦後のすぐから今まで50年程度の幅で作られた物でしょう。だから土器が決めれるのはせいぜいそこまで、7世紀第3から第4四半期、天皇で言うと持統天皇、天武天皇の時代かと考えられます。

百瀬

ちょっと補足させて頂きます。桜坂窯址の発掘調査で出ている瓦と明科廃寺の瓦がまったく同じ物があるということは、明科廃寺で使った他の品物も桜坂で焼かれただろう、だから桜坂窯址の時期がわかれば明科廃寺の時期もわかる。その時期はだいたい660年から700年位の間に入りそうだ。原さんの話を要約するとそう思われます。今度は瓦そのもののことで、ずっと瓦を調べておられる倉澤さんにコメントお願いします。

倉澤

昨年の3月まで勤務していた信濃国分寺資料館では、国分寺瓦が多く出ておりましてそれを中心にここまで勉強してきました。

古代瓦からみた明科廃寺創建時期ということで資料を見ながら説明します。この瓦は軒先に置かれる丸瓦で、素弁八葉蓮華紋という紋様名で呼ばれています。瓦の縁に圏線という線が1本巡り、ハスの花弁中央を低くくぼませ、中房には1＋8の蓮子を配しています。ご承知のように古代瓦は蓮の花を模倣していて、中央に蓮の種の粒々を9個付けその周りに8枚の花弁を描くという特徴の紋様で造られています。また、この瓦は縦置型一本造りという技法で作られていますが、そのことは後ほどにまたお話します。

明科廃寺の瓦と寿楽寺廃寺の瓦については、両方とも直接見させてもらいました。先日、安曇野市教育委員会が飛騨市に現物を持っていかれ、笵傷などを照合してきたと聞きました。笵傷とは、木製の型（笵）を使って蓮の花を造形しますが、使っている途中でできた傷のことです。

今回、新たにわかった重要な事実は、寿楽寺の方に新しい笵傷があることの確認です。ということは、明科廃寺の瓦の方がより古く作られた根拠になるわけです。今回の調査で双方立会いのもと、新たな事実として明確にされました。この紋様を持つ瓦は、明科廃寺の他では寿楽寺廃寺、衣川廃寺、天狗沢瓦窯にあります。いずれも縦置型一本造りという技法で作られた軒丸瓦ですが、滋賀県大津市南滋賀廃寺でこの技法の軒丸瓦が出たと最近発表されています。中大兄皇子による大津宮遷都が667年のことです。同じ滋賀県の衣川廃寺出土の瓦は7世紀第３四半期だといわれています。明科廃寺の創建時期については、京都大学の上原真人氏もそう述べられていますが、同じく7世紀第3四半期の後期だと考えます。

百瀬

壬申の乱前後の日本史に直接関係することも含めて瓦を通しての明科廃寺の時期を話していただきました。この明科の地と明科廃寺については、ずっと長い間研究し論文もいくつか発表されておられる桐原さんにお話しいただきます。

桐原

分かっていることは、今の話でありましたように、明科廃寺で出ている瓦は7世紀後半のものであるということです。その頃、瓦を持っているお寺はほとんどが本堂と塔は建てていただ

ろうということです。ところが、今まで調査した所からは本堂と塔の存在を示すような遺構は見つかっていない。例えば、基壇・礎石等は出ておりません。そこでどういう事が推察されるかというと、伽藍は調査域の西の方にあるだろうという事になり、今後の調査によるところが大であります。今日は不完全な資料ではありますがその資料に基づいてできる限りの推察でお話したいと思います。まず時期的なことで、7世紀後半という言葉が今まで出ています。どういう時代かというと、中央集権を目指す律令国家が形成される前夜の時代であり、大宝律令が施行されるまでの半世紀に当たります。この時に明科廃寺は建てられたんだということですね。竪穴住居などと違いまして、長野県においては初めての礎石を持つ建物ですから、完成までに10年はかかっていると考えてよいと思います。奈良の飛鳥寺は完全に出来上がるまで20年はかかっています。半分とみても10年ということです。

次に、お寺が創られた明科という場所についてまとめておきたいと思います。7世紀の中葉位まで信濃の国は誰が支配していたか、当然これは信濃国造司が支配していました。それに対して大和政権が何とかして信濃国造から権力を取りあげようとします。この7世紀の後半、色んな手段を尽くし権力を取りあげ、その結果が大宝律令の完成ということになっていくわけです。国造制信濃から今度は律令制信濃に変わっていく時代が7世紀後半、そういう時代に明科という地でお寺が建てられたんです。

ところで、この7世紀後半に今までの国造国信濃は10の郡に分けられてしまいます。誰が行政を執ったかというと、国は中央からきた国司が担当するわけですが、郡の方は10郡に分けられ在地の有力者がこれを司る。ところで在地の実力者といえば元の国造司であります。信濃の国の10郡のうち7郡までは旧国造司の一族が担当し、残った3郡は新興勢力が担当します。その中に安曇郡があるわけで、安曇郡を司る一番偉い人は新興であり旧国造司ではないということになります。では郡としての安曇の地位はどうであったかというと、郡の等級がありまして安曇郡は上中下小の下から2番目の下のランクがついています。したがって、安曇郡の場合は役人である郡司として大領、少領そして主帳が置かれます。

では、その安曇郡とはどの範囲なんだろうか。国の境、郡の境というものは、沢だとか山であるとか自然境界で決まっています。安曇郡は川によって区画をされた所が安曇郡となります。そして、奈良時代の天平12年（740）以後においてはその安曇郡の中に四つの郷（村）があった。安曇郡というのは実に広く、お隣の筑摩郡と比べても倍以上の面積がある。その中に四つの郷（村）があるだけ。一つの村は大体50戸ですから、200戸程度存在しているということになり、安曇郡という地域は生産性の低い所だなという見当はつきます。問題は郷である50戸のまとまりはどこに存在したかです。郷については範囲というものが書かれておりません。徴税のための手段として50戸の家をまとめて郷としているにすぎない訳ですが、大体一つの郷は五つから七つの集落で構成されていると思われます。それくらいの郷が安曇郡に四つ存在している、その一つは一体どこにあったのか、安曇郡の中で川が全部集まってくる水郷地帯の明科です。明科を目安に他の郷を考えてみると、水郷地帯の西側対岸の段丘地形ということになり七貴から会染のあたりが前科郷として想定されます。水郷地帯の西の方には八原の郷、八つの原から後には字が変わりまして野原あるいは矢原になって行きますが、古い地名が残っています。それから村上の郷というのがあります、

今までの説からいって北の大町から社のあたりではないかと思います。消去法からいくと高家（たきべ）の郷が残ります。これはどこだろうか、水郷地帯の東の方になると思います。明科は高家郷という郷の中に存在したのではなかろうかということになる気がします、これは私の推量であります。

次の問題ですが、明科廃寺は誰が造ったかということです。律令時代になり信濃の国は10郡に分けられていて七つの郡が旧国造の一族、安曇を含む三つは新興氏族であります。その新興氏族にどういう名前をつけたらいいかということになる。天平宝字（てんぴょうほうじ）８年（764）の記録に安曇郡の主帳（郡司の１人）で安曇部百鳥（あずみべのももとり）が登場します。おそらく廃寺創建時期の一世紀後であっても、郡司は安曇部の最高の権力者であったろうと推測します。奈良時代になっても財力を持っている、そうなると明科にお寺を造ったのは郡司です。極めて簡単明瞭な推察であります。

百瀬

後半はご自分の推測ということなのでまた論議していただきます。瓦等出土資料から金堂や塔の配置された寺であり完成まで10年程かかること、7世紀後半における信濃国造と郡司と明科廃寺との関係等、注目されるお話をしていただきました。

〈途中休憩〉

桐原

第２次調査の時に見学に来まして森郁夫さんや八賀 晋（はちが すすむ）さんと話し合った事がございます。その時に調査域の中から出てきた遺構が話題になりました。西の方には南北に走る道があり、その道を挟んだ東の方に掘立柱建物址がみつかっている。資料をご覧ください。柱穴が数多くありまして、そこに線を引いて建物の構造等を検討するわけです。森さんたちとどんなことを話したかというと、いわゆる伽藍の東の方には、僧の生活する建物や倉庫が存在したんだという事です。これは奈良のどの古いお寺を見てもいえることでございまして、伽藍回廊の外側に僧坊とか倉庫とかそうゆう付属建物が存在するのです。

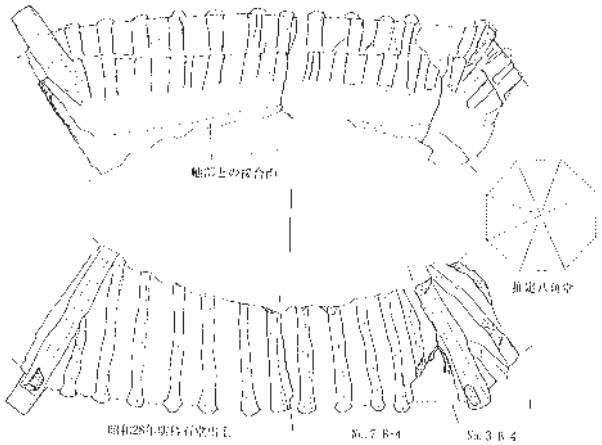


図６　明科廃寺出土瓦塔実測図

ところで、明科のこの部分からは焼き物の塔である瓦塔という面白い遺物が出ている。瓦塔は裸で立っていたはずはなく、当然鞘堂（さやどう）などの建物内に安置されていた、となると方形の建物が存在しなければならないですね。四角の穴を結んだ２号建物址、これが鞘堂と推定される。それからさらに南側の方形の１号建物址、これも候補に入れておいたらいいだろう。この建物の建たっていた時期はいつ頃なのか、今までの全国の瓦塔関係の解説書を読んでみますと、瓦塔の盛行するのは８世紀の後半だといわれています。松本平の中で瓦塔を焼いた窯が見つかっている塩尻の菖蒲沢（しょうぶざわ）窯址が唯一で、出土した瓦塔の年代は８世紀の後半ということになっている。瓦塔というものは重たいものであります。遠くの窯で焼いて持って来たと考えるよりは、在地の窯で焼いて明科に立てられたんだとしていいだろう。ということになると明科の瓦塔もまた８世紀後半でいいんじゃないかという気が

する。8世紀の後半に明科廃寺の東側の方に瓦塔が建てられていたということになると、これはまた後の方で話が出てくると思いますが、明科廃寺が何年から何年くらいまで存在したかに直結しますので、ここまでのお話とします。

百瀬

瓦塔についてもいろいろなことが言えそうですが、瓦もここで焼いたのか他で焼いて持ってきたのか問題があります。ここでは寿楽寺廃寺等飛騨の古いお寺との関係、瓦を中心としての話を倉澤さんお願いいたします。

倉澤

明科廃寺軒丸瓦との笵傷比較から、明科廃寺の瓦より新しい可能性が高まった飛騨の寿楽寺廃寺は、日本書紀の記載で朱鳥（しゅちょう）元年（686）に存在した飛騨国伽藍と想定されておりますから、この年から10年前というと7世紀第3四半期に寿楽寺創建となると思います。この寿楽寺廃寺からは尾張元興寺（がんごうじ）（名古屋市）の忍冬紋（にんとうもん）軒丸瓦が出ており、市立市川考古博物館の山路直充さんがまとめています。尾張元興寺の軒先瓦と寿楽寺廃寺の軒先瓦では、忍冬紋の周縁にある圏線紋に非常に共通性があります。この圏線紋は衣川廃寺にはなく明科廃寺にはあります。このことを山路さんは非常に意識しておられます。

百瀬

飛騨と尾張の関係について、全てを確定的に言えるわけではないですが、明科廃寺は両者との関係等どうなっていたかという課題は出てきます。もう一点、瓦塔を納めるための建物が道を挟んで東側にあったという桐原先生の指摘を受け、伽藍そのものと東側建物の関係等、原先生よろしくお願いします。

原

発掘最中に見せていただいたんですが、細長い1号建物址とその北の2号建物址は重なっていますから、古い建物を新しく立て替えた結果がこうなっています。建て替えが行われる建物は本堂とかそうではない可能性が強く、僧坊とかが考えられます。具体的に言いますと、建物は1回壊れるか壊した跡に別の建物を造っていますから、本堂とか金堂とか決められた位置に大きな建物が所在する空間ではない可能性が強いのではないかと思います。道路がありますので日常空間に近い僧坊とかそういう空間ではないかと思います。

百瀬

ここまでで話題となっていますが、伽藍の周囲に石がずっと敷き詰められていて、伽藍から外れた所に僧房のような建物がずっと並んでいる、明科廃寺のこの状況とよく似た寺の跡が飛騨の寿楽寺廃寺のすぐ近くに位置する杉崎廃寺で発掘調査されています。調査を担当された飛騨市教育委員会の方が出席されておられるので、今の話を受けて杉崎廃寺の伽藍や外側の建物と関連してのコメントいただきたいと思います。三好さんお願いします。

図7　杉崎廃寺遺構全景写真

三好

飛騨市教育委員会の三好と申します。よろしくお願いします。お話の中で思った事の一つは瓦の製作がこの信濃が先ということに関してです。杉崎廃寺は７世紀の末から８世紀初めに造られたと考えられている杉崎廃寺は明科廃寺や長野県史で見る大村廃寺と石敷がある点で似ており、寺の造り方も信濃と関連があると感じました。

もうひとつ、伽藍の外側の建物については、資料のように伽藍中枢部（ちゅうすうぶ）の周りの広い範囲に伽藍地と呼ばれている寺院を含む建物が建てられる部分があります。さらにその外側を取り囲むように窪んだ地形が巡ります。なお石敷は伽藍中枢部に限って設けられています。

百瀬

明科廃寺発掘担当者の大澤さん、実際に調査された状況や東側の建物群についてお願いします。

大澤

明科廃寺は昭和28年に大量の瓦が出たということや客土をしたときに遺物が出たことで明科町では古代の寺跡としてきました。たまたま住宅の建て替えがあるということで、そのお宅にお願いし発掘調査が始まりました。掘った所は中枢伽藍ではなかったんですが、中枢伽藍以外の所にも建物があったことが明らかになり、全体が廃寺を構成していたと判断してきました。

明科が当時の高家郷に属すかどうかという部分についての積極的な根拠はありませんが、明科廃寺は安曇郡の中で唯一の古代までに創建された寺院です。安曇郡の一番中心にあったという場所に廃寺があったという事が言えると思います。調査の整理途中ですが、この辺を将来明らかにしていきたいと思っております。

百瀬

明科の西に位置し安曇郡の郷として知られている矢原の遺跡群や穂高地区について、これまで調査等を担当されてきた山下さんお願いします。

山下

穂高地域は明科と同じで７世紀及びその前後の時期の集落が集中して営まれ、調査で実態がわかりつつあります。ただし、大きく違うことは、明科には当時の寺院があり建物等見たことも無いようなものが出ていることです。合併後に明科の土器をよく見ますと穂高と非常に似ています。たぶん明科で焼かれたものが穂高に入ってきたのでしょう。特に古墳から出ます須恵器を見ますと、明科の潮の古墳から出る須恵器と非常に良く似ています。上原古墳から出た須恵器はぐにゃぐにゃになっていて普段の生活には使えないのであえて古墳の中に埋葬していたらしいのですが、これも明科のものと良く似ています。

百瀬

須恵器について今まであまり意識しなかったけれど､最近よく見たら明科の物と似ていたと、実際に調査を担当した山下さんが言っているのですね。古墳の中に埋められている須恵器が両方でよく似ているということは、明科と安曇の関係のヒントになる重要な指摘だと思います。

豊科町の発掘調査に長年関わり、古代の東山窯址を担当して調査された山田さんに、特に高家郷の話を含めた豊科地域の古墳時代から奈良時代にかけての状況、調査の中で思われている事等ありましたら簡単にお話しください。

山田

高家郷の問題についてですが、７世紀を中心とする時期の集落がどこで発見されているかというと、大町・池田・明科・穂高の地域ですの

図８　安曇野市内の主な遺跡分布図

で、明確な根拠はないのですが配列から考えるとやはり高家郷が明科である可能性は高いと感じています。調査で明らかになった明科地域の７世紀に属する４集落は、高家郷を構成する村にそのまま当てはまると感じています。

百瀬

桐原先生の話では集落（遺跡）四つ程度で１郷が該当するとありました。山田さんの話だとその集落から考える古代の郷が四つ、その中に明科が入っているのではと話していただきました。なかなか結論的なことの言えない部分がありますが、研究を重ねるほどに明科及び明科廃寺の重要性と明科と安曇の関係の深さに向かっているのを思います。これを踏まえて、現在までの調査からこれからの研究について市の担当者土屋さんお願いします。

土屋

夢を含め希望的な話をさせていただきます。

明科という地域は実際のところ地形的にはそんなに広い場所ではありません。なかなか難しい面もありますが、近年になり調査で得る情報は多く集める事はかなりたくさんできています。コンパクトに遺跡がまとまっている点をメリットと考え地道な情報収集で創建期の古墳時代末から廃絶期である平安時代までの集落展開を調査追究したいと考えています。これに際しては明科はかなり魅力的な地域だととらえていますので、機会ある毎に精度の高い発掘調査をと考えています。

百瀬

明科というある意味限られた範囲だからこそ、廃寺を含め今後の調査等に期待できるというコメントだと受け止めました。では残りの時間を参加された方からの質問等とします。どうぞ。

参加者 A

天武天皇、安曇族、明科廃寺の関係は非常に密接な関係があるように思います。天武天皇と安曇族を調べるヒントをいただきたい。

参加者 B

明科廃寺という本格的な大きな寺を７世紀の後半に建てるにはそれなりの財力と労力が必要だったと思います。それはどこから調達してきたのか見解をお聞きしたい。

桐原

大きな問題ですぐに答えられないと思います。安曇郡で一番お金と力をもっているのは郡司であります。だから郡司がつくったんだろうと私は推定しております。政治力をいうと７世紀の後半は大変な時代です。その中で安曇連（あづみのむらじ）は蘇我氏（そがし）や皇室にうまいぐあいに取り入り生き延びてきた。天智天皇の時白村江（はくすきのえ）の敗戦で大きな痛手を受け、それからは下り坂で８世紀に入った途端にガラガラとなってしまいました。

このような中央での動きは地方にも波及してきますが、７世紀後半明科の地にお寺が造られるような動機があったのか、白村江の敗戦により百済（くだら）から多くの亡命者が来たが、うちの何割かはこの安曇郡にも来た、寺や瓦に関する技術者も含まれるだろう。天武天皇の晩年、隣の筑摩（束間（つかま））郡に行宮（あんぐう）を造ろうという話が出ました。落ち目の安曇氏としてこの機会を利用してなどと想像します。

参加者 C

瓦塔が推定八角堂となっているがどこからそれがわかるのですか。

大澤

新旧の調査で出土した瓦塔が接合し、その屋根角度を調べると四角形ではなく、角度から八角の塔を想定しました。

百瀬

今後のこと、将来どうしていくかという観点で発言していただけませんか。

参加者 D

旧南安曇郡で生活してきたが、明科廃寺についての発表を聞いて、非常に価値のある文化財だという思いを深くしました。このような学習の場を通じ市民の交流を広げることで、チームとして今後いろいろな勉強をして保護活用について検討し合うことで新たな展開につなげられると思います。

山下

有意義な時間をありがとうございました。今後安曇野市の歴史を探るキーワードとして明科廃寺を研究し新しい成果が得られることを期待し、私自身も関心を持ちたいと思います。また、今後もこのようなシンポジウムを開きたいと考えます。

三　岐阜県飛騨市への現地見学で得たもの

このようなシンポジウムの討論を経て、飛騨寿楽寺廃寺と杉崎廃寺の調査内容が明科廃寺を考えていく上で重要な比較対象として浮かび上がってきました。岐阜県飛騨市に両廃寺を訪ね、出土遺構及び遺物を実見する現地見学講座を実施しました。寿楽寺廃寺出土の軒先瓦等と杉崎廃寺の礫敷き及び礎石に建つ伽藍について実物に接するとともに、古代寺院が密集して建立されている飛騨古川の地に直に触れることが研修目的でした。

軒先瓦については飛騨市教育委員会のご配慮で両者を直接比較し笵傷に及ぶ観察ができました。現寿楽寺にお邪魔して、寺で多年採集してきた貴重な出土遺物を拝見させていただきました。杉崎

廃寺の礫敷遺構と伽藍の礎石等については、史跡公園内で遺構に直接触れての見学ができました。それとともに、古川の地を歩きながら地勢等の実際をみるなかで、明科の地理的条件等を見直してみる機会になりました。前面を川で隔てられ背後に山を背負う小範囲の傾斜地という地形的特徴は、明科の状況をさらに顕著にしたものととらえることができ、これまで古代寺院の立地条件を考えてきた視点等を改めて考える機会となりました。さらに、瓦供給窯が川を隔てて築かれた可能性が高いことがわかり、周囲に展開する集落との関係等も感覚として理解できたように思います。

行き帰りの車内研修として、飛騨と信濃との交流路（安房峠越を中心として）の歴史を研修しました。平安時代の地図に両国を直接結ぶルートが描かれており、古代に飛騨で乗鞍岳を安房岳と呼称していたこと等、交通・交易の道としての安房峠越について、同笵瓦の存在確定を受け古代からの資料等でまとめました。参加者からの実感を含めた意見として、安房峠は短時間で越えられる距離の短い道として予想より利用価値は高いと感じた、等の声がありました。加えて、時期や天候そして峠を越える体力等の条件が必要で、明治以降の街道整備より前は、現実に普通の人が使うには厳しい道だったろうとの指摘もありました。

第３回講座は、まずは現地に足を向け実物に触れることが主な目的であり、課題や論点を明確にしての研修として企画しませんでした。ただし、飛騨古川と信濃明科の共通点を意識して、両市教委提携のもとに実施した最初の現地見学に大きな意義があったと考えています。

四　今後の明科廃寺を見通して

本講座を通しての成果と新たな課題及び今後の展望を整理してまとめとします。

講座を実施しての最大の成果は、何より安曇野市民を中心に多くの方々に対し明科廃寺の存在や価値を広く認知させた点だと考えています。従来から関心を寄せ研究等を進めてきた方にとっても、調査研究の経緯から現在の研究到達点と評価までを、未報告資料等に触れながら理解する機会となりました。これまで調査報告書等で断片的に提供された情報等を基に論述が行なわれてきましたが、今回を通し明科廃寺を軸とした調査研究の蓄積による廃寺の見直しとなりました。

次は、明科廃寺及びその周辺の調査研究担当者と、その調査結果から廃寺創建時期や創建の背景等を論及している研究者が、一堂に会する形で公開の場で論議した点にあります。特に今回は、廃寺創建時期を７世紀後半から終末と位置付けて研究を一歩進めたこと、礫敷遺構東側の発掘調査による検出遺稿を類似の調査成果等を含め具体的に検討を深めたこと等、参加者にも理解を深める形での究明が実現できました。

一方で、改めて明科廃寺解明における第１の課題として鮮明になりましたのは、客観性と学問的根拠を持った（発掘）調査の実施により、廃寺の内容を具体的な資料の裏づけで解明する必要性です。特に、石敷き遺構が所在する字石堂の区域は、部分的にでも調査を積み重ねることが必須条件となります。杉崎廃寺と同様の構造を有する伽藍の存在が確認できれば、廃寺建立の異議やその評価に大きく関わる研究の進展につながり、将来に向け廃寺の保護等に重要な影響を与えることとなるでしょう。(3)

次の課題としては、廃寺解明の補完的研究調査として、旧明科町内等周囲の遺跡等に対するアプローチがあります。桜坂古窯址のある犀川左岸を

(3)　住宅密集地と化した廃寺推定範囲を今後どのように調査し保存等の策を講ずるかは、地元地権者の方々との相談も含めて進めねばならず、息の長い取り組みとなりましょう。ただし、杉崎廃寺の石敷伽藍址は文化庁との協議で国史跡指定が打診されるなどから、全容が解明される必要と価値は非常に大きいと考えます。

▲昭和 51 年の明科風景

▲大正６年の明科風景

含めた地域の古墳時代から古代の状況がさらに明らかになることで、安曇郡や高家郷との関係や創建氏族の性格などに迫ることができるでしょう。加えて、未刊行の報告書を公にすること等これまでの調査結果等を広く共通情報として示すことが肝要であり、より具体性のある資料を増やしながら、廃寺の実態や建立の背景をこの時期の歴史的状況を踏まえ究明することに直接つながると考えます。

第３の課題として、同笵瓦等から広域的交流や影響が実態的に把握されつつある現今の研究進展を受けて、大和王権の動向や信濃国情勢と関連付けた研究が重要な課題として浮上しています。シンポジウムでも提起されたように、壬申の乱や束間行宮造営と廃寺建立、下伊那の前方後円墳や屋代遺跡出土の木簡等も視野にしながらさらに追究していきたい。

最後に重要な課題として、明科廃寺の保護活用策の具体化こそが、緊急性と長期的展望を併せ持って取り組むべきこととなります。講座参加者の多くは初めて明科廃寺のことを知ったかと思います。その価値の理解とともに今後の史跡保存にも目を向け始めている現状を大事にして、博物館としての継続的な廃寺追究と博物館外との連携で保存活用に向けて前進していきます。

発見以来 60 年近くという長い時を経て、今まさに脚光を浴びつつある明科廃寺です。旧南安曇郡の町村に加わり安曇野市に合併した明科の地の歴史解明という面も含め、本博物館講座は研究保護スタートのチャンスと位置づけられます。平成 25 年度には、博物館友の会研修と形を変えて廃寺の継続研究を進めようと準備しています。

おわりに

ここまで繰り返し述べてきましたが、明科廃寺研究に向け本講座で目指したものは、これまでの調査研究を整理し意義や評価を周知するとともに、将来の保護保存を考え合っていくことにありました。その意味では、予定数以上の参加者によって熱のこもった研修が実現したことは、最初のステップとして大きな意味があったと評価しています。ただし、廃寺自体の研究進展に向けての課題は厳然と残っており、むしろ史学等の研究調査の積み重ねによる実態解明は緒についたばかりといえます。その意味で、来年度以降の博物館講座等で廃寺究明活動が粘り強く展開される意味や意義を自覚して、さらに確実に歩みを進めたいと決意しています。そして、それが実現できた先に、明科の地に県下で最も古い時期に建立した本格寺院の実態解明と歴史的意義等の確立が少しずつ進展し、それが市民等による保護保存の動きとして大きく拡がると確信し強く願いつつ、来年度以後の

企画・構想を詰めています。

本レポートは講座での実践内容を記録として残すことを主眼とし、明科廃寺を究明してきた先学諸氏の研究成果を利用して記述いたしました。また、シンポジウム出席講師はじめ関係機関等のご協力により充実した講座が可能となり、講座に参加された方々のご意見等が究明を進める大きな力となりました。以上、おことわりいたすとともに深く感謝申し上げます。(4)

図版引用文献

図1　豊科郷土博物館　2008『きのう　きょう　あした』№2
図2　安曇野市都市計画図に加筆
図3　明科町教育委員会　2000『明科廃寺址』
図4　同　上
図5　安曇野市教育委員会　2011『安曇野市の考古学2011年表』に加筆修正
図6　明科町教育委員会　2000『明科廃寺址』
図7　倉澤正幸　2012『出土軒瓦から考察した信濃の古代寺院』信濃64-10
図8　古川町教育委員会　1998『杉崎廃寺発掘調査報告書』
図9　目で見る明科史刊行委員会　1977『目で見る明科史』に加筆修正
別表　明科町史編纂会　1984『明科町史　上』

(4) シンポジウムに参加の講師から多くの資料を用意しての発言等がありますが、本論ではその全てを掲載することはできていません。同様に、長年の研究史や今回の講座に向けての参考文献も多く扱いましたが、ここでは図版引用文献資料にとどめます。資料及び参考文献に関する質問などについては直接博物館に問い合わせください。

安曇野市豊科郷土博物館
紀要　第１号

２０１４

発　行　平成 26 年（2014）3 月 31 日
安曇野市豊科郷土博物館
長野県安曇野市豊科 4289-8
電話 0263-72-5672
印　刷　藤原印刷株式会社